

婦人 と子ども

第四卷第五號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡て左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレイベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込されると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年五月二日印刷
同 年五月五日發行

不許
複製

發行所	東京市神田區西小川町一丁目一番地
編輯者	有田久龍
印刷者	東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所	女子高等師範學校附屬幼稚園内
發賣所	東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京 東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第四卷第五號目次

子ども

鬼中佐……………一

水雷のお話……………二九

小學校の茶話會……………三一

いとつぷ物語……………三三

閉塞隊勇士の行狀……………三三

婦人と子ども

盲啞教育の起原……………小西信八…三六

幼稚園……………正 臣…三九

同……………萊 靜…三九

今年の春某幼稚園の祝意に連りて

女教師の心つくしを思ひやりて……………秋…三九

海のあなな……………佐々木信綱…三九

旗とり遊び……………小林つねを…三九

婚姻の要件……………谷川 清…三九

幼兒の友としての動物……………松村ひさ…三九

耳漏の注意と豫防法……………故飯島八千溪…三九

木綿漂白新法……………平岩學洋…三九

料理詞……………石井泰次郎…三九

黒澤登幾子傳補遺(完結)……………下村三四吉…三九

雜 報……………三九

女子高等師範學校●保姆養成所●會報



もど子と人婦

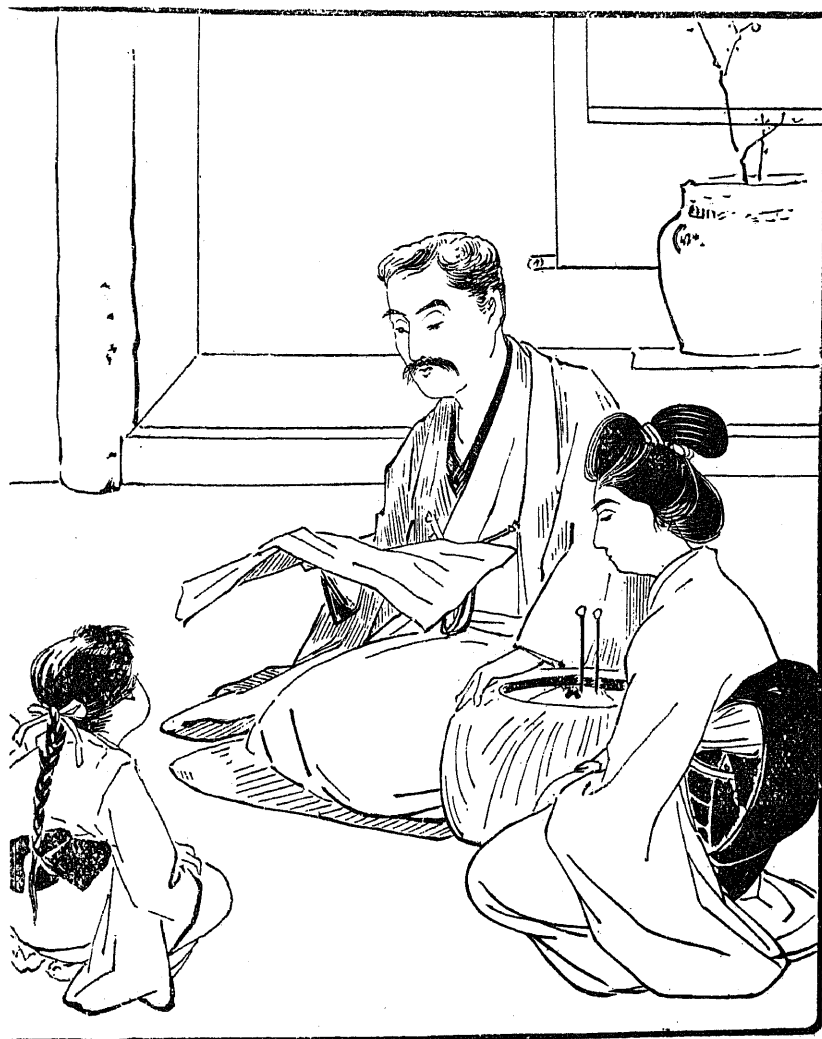
號五第卷四第

鬼中佐

やまとの翁

今日は土曜日の夕方、太郎さんのお家では、今しも、皆で揃って、お夕飯を済ました所で、いつもの通り、お夕飯後のお話しが始まるといふので、太郎さ

んと、妹の總
 ちゃんとは、
 もう、さっきか
 ら、お父さんの
 右と左とにち
 やんと座って
 待て居ます、
 お父さんは微
 笑やかに
 父「太郎さん、
 今日は何のお



話をしようかな』

太『鬼中佐！鬼中佐のお

話をして頂戴よ此間討

死をした、そら、廣瀬

中佐の』

父『ウン、總ちやんは、どうだな』

總『私も 夫が宜いわ、ねー、あんなに豪いんだもの』

父『夫じゃあ今晚は中佐の旅順口閉塞の話かな、よし／＼然し先

づ中佐の生ひ立から、だん／＼順を追って話して行くことにし

よう。さあ、太郎さんも 總ちやんも、音なし／＼して聞くのだ

よ



杭三



太『おっ母さんく早くいらっしやいな、お話が始まりますよ』

總『私呼んで来るは、勝手に居らっしやるのだから』

と、いって、總子は勝手の方に走って行きました。そして丁度

勝手の御用を済ませたおっ母さんを、後から押し押しして、こ

ゝに這入って來ました。

太『おっ母さん今から鬼中佐のお話をして頂くのよ、おっ母さん

も、お聞きなさいな』

母『おやく軍神と名のついた、あの廣瀬中佐のお話ですって、そ

れじゃ、おっ母さんも聞かして戴きませうよ』

と言つて總子の側に座はりました。

太『さあ、お父さん、して下さいな』

父「じやあ 始めようかな」

廣瀬中佐の生れたのは、今から丁度三十七年前、即ち明治元年五月二十七日のことで、所は九州豊後の國直入郡竹田村といふ所、中佐の家は、そら、太郎さんも知って居る南朝の菊地氏から出たのだといふことだ。中佐の忠義なものも無理はなからう。中佐のお父さんは重武と言ふ人で、御維新の時分 いろいろと天子様の爲めに忠義の働きをせられた方なのです。中佐の家筋は、こう云ふのだが、併し中佐は不幸にもお母さんに早く分れて、兄弟五人ながら、皆お祖母さんの手に育ったといふことだ。夫から確か中佐が十歳位の時だ、お父さんは、之迄の手柄に依

て、飛驒ひだの國くにの高山たかやまといふ所ところへ來きて、裁判官さいはんくわんをお務つとめになることになつたから、中佐ちうさも連つれられて來きて、此地このちの小學校せうがっこうに入學にうがくすることになつた。こゝの小學校せうがっこうでの成績せいせきは、中佐ちうさは中々なかによく出來でたが、取とり分け運動會うんどうくわいには、いつも選手せんしゅで、其中そのなかでも一番相撲はんすが得手えてだつた。柔道じうどうの名人めいじんになつたのも、全く之これが爲ためめだろーよ。

飛驒ひだの小學校せうがっこうを卒業そつぎようしてから、兄あにさんの勝比古かつひこさんといふ方かた。これは今いまの大島艦長おほしまかんちやう、海軍中佐かいぐんちうさになつて居いられる、この兄あにさんと一所いしょに東京とうきやうに出でて來きて、二三年ねん、或あるる兵學者へいがくしやの家に寄宿きしゆくして漢學かんがくだの歴史れきしだのを勉強べんきやうして、夫それから海軍豫備校かいぐんよびがっこうの攻玉社こうぎくしゃといふ學校がっこうを卒業そつぎようして明治十八年めいしちはちじゅうはちねんには、とう／＼築地つぎちの海軍兵學校かいぐんへいがっこう

に入學することになった。

中佐の學校の成績は、何處でも學力が優等で、運動には熱心であるし、殊に、自分より目下の生徒には至って優しく交際をし、下の者を苛める無法者や亂暴生徒に對しては、何處までも對抗うて、議論でも腕力でも、抑へ付けねば承知しないといふ風だから、何時も、校中の人望は、悉く中佐の一身に集まつて、あの男こそ、卒業の後には、どんな英雄豪傑になるだらうかとは、誰もく中佐の前途に向つての期望の言葉であつたのだ。

夫から、兵學校で勉強すること三年間、明治二十二年四月には、とうく兵學校を卒業して、海軍少尉候補生となり、練習のた

め南洋に向つて、遠洋航海と出かけた。多年の宿望漸く成り、
茲に始めて同學の士と彼の比叻艦に乗り込んで、見渡す限り極
まりなき青海原に波を蹴つて出た時の、此年少士官の喜びは、
まあ、どんなだったと思ふ。まづ太郎さんが、此三月の卒業式
に、先生から御褒美を戴いて歸つた時位の喜びだったかも知れ
ないな。さて、こゝまでは、ざつと中佐の生徒時代といつてよ
からう。これからが、愈々本舞臺に這入る所だ。
中佐は、かの遠洋航海から歸つて其翌年、遂に海軍少尉となり、
軍艦だの、水雷艇だのに乗り込んで、専ら、海軍のことを研究
して居つたが、さて、年月はだんく進んで明治二十七年の年
を迎へたが、此年から二十八年にかけて、日清戦争が起つた。

此時このときに中佐ちゆうさは、軍艦ぐんかん扶桑ふそうに乗り込んで居いたから、次の様ような詩しを作つくつた。

生于扶桑ふそうにうまれ、死于扶桑ふそうにしず、一死いつし酬くはぐ國こく、七生しちせい護ご皇みかみ。

どうだ、太郎たろうさん、此詩このしの意い味みが分わかるかな、扶桑ふそうといふ日本にっぽんに生うれて來きて、扶桑ふそうと名なのつく軍艦ぐんかんで死しぬのは、面おも白しろい、國くにの恩おんに報はぐゆる爲ために一度ひとは死しぬるが、七度ななども生うれて來きて、天皇てんわう陛下ていかに忠義ちゅうぎを盡つくさうといふのだ、どうだ、豪さかい者ものだらう。

夫またから、間まもなく、海軍かいぐん大尉だいゐに昇進しやうしんして、今度こんどは水雷艇すゐらいていに乗り込んで、威海衛ゐかいゑいに定遠ていゑんを打うち沈しづめた時ときなど、眞先まきさきに進すすんで働はたらいたのだ。

さて、日清戦争にっしんせんそうは、見事みごと我國わがくにの大勝利だいしやうりとなつて濟すんだのだが、

たゞ残念で、堪らなかつたのは、戦勝の結果として、日本が支那から取った遼東半島を、むざ／＼露西亞の爲に還附しなればならぬ事になり、折角、取った彼の土地は却って露西亞が占領して仕舞はうといふ形勢になつたのだ。これには、日本國民たる者、誰とて、残念がらぬ者はなかつたが其中にも、殊に廣瀬中佐は、『よし／＼、今に見よ、屹度、敵を打って非道い目に遭はせてやろう』といふので、夫からといふものは其事を一生の目的と定めて仕舞つて寝てもさめても露西亞の事ばかり調べて居た。戦争するには、何んでも、彼國の事を一から十まで知つて置かねばならぬといふ考からだ。こゝういふ風だから、遂に選拔せられて、明治三十年、露國留學生として、政府から派

遣せられることになったのだが、此時、中佐の喜といったら、もう今にも、目的が達せられたかの様だった相だ。

さて、露西亞では、彼れこれ五年も居たのだが、其間思ふ存分、彼國のことに付いて調べた。

然し、中佐は學問もよく出来るし、人には親切であるし、おまけに剛勇と來て居るから、露西亞の軍人の間でも、大變に評判がよくつて、誰一人中佐を賞めぬ者はなかったといふ事だ。あ、夫から、まだ話してなかったが、中佐は、兵學校に居た時から、嘉納先生の門に入つて柔道を稽古して、中々立派な腕前になって居た所からして、露西亞に居る中面白いくことが起つた。其話

はこうだ。或日、露西亞の軍人等が力自慢をやり出して、

「なに、日本人なんか、第一身體が小さいんだもの、賢いかわらんが、力較べでは、とても吾々に敵うもんか」

といひましたから、貢ん氣の中佐は、何で黙つて居よう。

「こりゃ面白い、夫ではお相手をしよう、さあ、何人でも宜い力の強いと思ふ方は、さあ來た、一度に投げ飛ばすから」

といひさま、庭に飛んで下りると、露西亞の奴等は、なんだ生

意氣な、大きなことを言ふ、じゃあ一ひしぎにしてやろうと

いふので、其中でも力の一番強さうな、大きな男が、三人一度

に掛けて來た。併し、一方廣瀬中佐は例の講道館柔道の手で以て

三人の大男を何の苦もなく、ひねり倒した。さあ、そうなると

中佐の強力といふことは露西亞では誰知らぬ者もない位、遂に

は、皇帝の
耳にまで這
入って、天
子の御前で、
相摸の試合
を御覧に入
れることに
もなった位
だ。
夫から、五
年目の末に、



とうく露
西亞を出發
して歸朝の
途に付いた
が、露西亞
の軍人等は、
丸で自分等
の兄弟とで
も分れる様
に分れる惜
んだ相だ。

かくて露西亞の都を出たのが、明治三十五年の一月十四、彼國の寒氣の厳しいことといったら、とても、此處では想像が出来ない位、普通なら、船で歸れば、至極安樂なのだ、中佐は、鰯があるから、態々、西伯里亞に廻はって、雪や氷の中を、鐵道や櫓に乗って、あらゆる困難と寒氣と戦って、遂に其年三月無事歸朝せられた。

中佐は此通り、いろ／＼な方法で露西亞の事を調べて居たのだが、夫が案外にも早く役立つ事になった。中佐は歸朝してから、戰闘艦の朝日に乗り込んで、其水雷長になつて居たのだが、其二年目、即ち、本年二月になつて、日露の關係遂に破裂し、中佐は、今迄の研究を實地にやることになつて、意氣軒昂とし

て佐世保を發したのである。

さあ、夫からは、何時か話した様に、先づ仁川の勝利となり、旅順口の水雷襲撃となつたのだが、露西亞の軍艦どもは、丸で我勢に呑まれて仕舞つて、さっぱり旅順口を出ないから、夫ではいつそのこと、港の出口を塞いで仕舞はう、其爲には、大きな古い船を五艘許り其出口へ沈めるのがよからうといふ我が海軍の方の相談になつた。

併し、これは、極めて難儀な危い仕事だ。何しろ、敵の砲臺の下まで行つて其上敵の軍艦も立て籠つて居る、其間際へ行つて船を沈め様といふのだから、非常な勇士でなければ、とても其仕事は出来ないし、又出来た所で生命は、到底助かり様がない

と見ねばならぬ。そこで、聯合艦隊司令長官東郷中將は、諸艦からして、此決死の任に當るべき勇士七十七人を募つた所がどうだ。之に應じて、吾も吾もと願ひ出た勇士の数が都合二千人からあつたといふことだ。此中からして、更に七十七人を選び出して、其人數と指揮官とを、五艘の船に乗り込ました、船の名と指揮官とは

天津丸……………有馬中佐

報國丸……………廣瀬少佐

仁川丸……………齊藤大尉

武揚丸……………正木大尉

武州丸……………島崎中尉

そこで、これ等の船には石炭を一杯積み込んで出たが、之は閉塞本隊で、他に水雷駆逐艦隊は本隊を掩護する役に當り、又此役を済ました後、船の勇士を載せて歸る爲めに、水雷艇隊が一所に出た。出る前の晩に當って、東郷司令官は、此等の決死隊一同を旗艦に招いて、饒別の酒宴を開かれて、杯を舉げて一同の成功を祝した。そこで、一行の志氣益々奮ひ盟つて事を成就せずんば歸らずといふ意氣達は中々盛なものであつた。中佐は此時

報國の操は高し笠置山

朝日に匂ふ敷島の花

といふ歌を咏んで、懷には亡き父君の寫眞と、兼ねて兄とし師

とし親んだ八代大佐の寫眞とを收めた。

かくて、二月二十四日の午前二時といふに、船列整々として旅順に近づけば天寒うして浪荒く、夜は暗うして咫尺も分らず、敵の艦隊は、此前二度の我が襲撃に恐ち怖れて、探海燈も點けぬと見たり。そこで、閉塞本隊は、浪を蹴破り、全速力を以て、港口まで突き進んだ所が、此時敵艦は始めて我が襲撃を覺ったと見えて、俄に探海を以て四方を照らし、本隊目がけて雨霰と大砲をうち出した。其音のすさまじい事といったら、千百の雷が一時に落ちる様で、今迄の静かさは打って變つた光景だ。まかり間違ふといふと、五艘の閉塞船は、目的の所まで行かない中に、撃ち沈められなければならぬ所だが、そこは日

本の海軍士官丈けに、甘く潜り抜けくは乗り切つて、港の出口に近づき、めいく此處ぞと思ふ場所に行つて碇を下して自分で火薬に火をつけて爆發沈没した。

此時廣瀬少佐の指揮した報國丸は、旅順口の東口を目がけ、霧の様な敵の砲丸を物ともしないで、霧地に突進したのだから、敵は、これこそと思つてとりわけ猛烈なる砲撃を加えたのだ。併し少佐を始め、十六勇士はビクともしないで、丸の下で甘く船を沈めて置いて、一同短艇に乗り移つたのであつたが少佐は『や、仕舞つた、船の中へ短刀を忘れて來た』といつて、今や沈みつゝある船へ飛び上つて再び彈雨の間をくゞり抜けて、其短刀を取つて來た。そして、短艇にはハンカチーフを高く竿の先に

翻へして目標にし、恐れず迫らず漕ぎ返つた武者振りには、
とて感心しない者はなかつたといふ話した。

其翌日、露西亞側では、此閉塞船を戦闘艦だと間違へて日本の
戦艦四隻を撃沈したといつて、喜んだのは可笑しかったではな
いか。

か程ひどい、大膽な事をやつたのであつたが、我が軍の方は報
國丸に三人の負傷者があつた丈で、残らず無事に引き上げた
といふのは、全く、天の助けといはねばならぬ。少佐はこの功
で、中佐に昇進し、金鵄勲章功四級を授けられた。

然るに、此大計劃によりて勿論、敵の膽をひしいで一縮にさせ
た事は疑なかつたのだが、残念な事には、港口は全く塞り切ら

んで、また少しの明き口があるから、いつそ、も一度やり切らうといふ所から、三月二十七日の夜明け方、更に第二回の閉塞隊を繰り出した。

さて、今回選出出した死士は六十五人、其船名と指揮官との名前前は

千代丸……………有馬中佐

福井丸……………廣瀬中佐

米山丸……………正木大尉

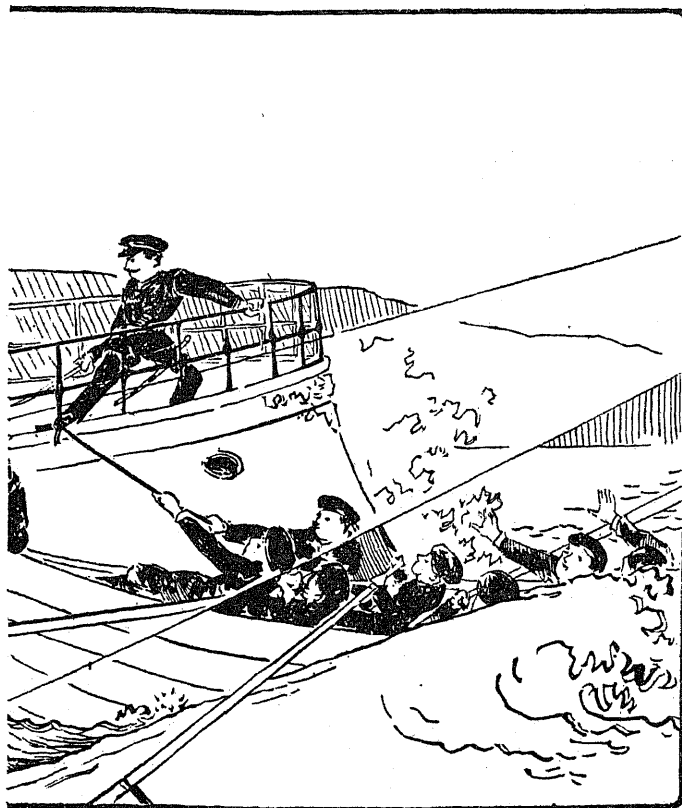
彌彦丸……………森中尉

かくて、この四隻は、前回の様に驅逐艦隊と水雷艇隊とに掩護せられ、波を破りて旅順口に進んだが、丁度港口から二哩許り

の處で、忽ち敵から發見せられた。『そら、又日本艦隊の襲來だ
 っ』といふので、右と左との砲臺からも、碇泊軍艦からも、う
 ち出したとはく、四隻の閉塞船目かけて、こゝを先途と砲撃し
 た。併し我は何れも死を決した勇士だから、『なあにこれ位
 の事何だ』と云ふ勢で、雨と注ぐ彈丸をはいくぐりく進んで
 行つて、各自思いくの處に船を沈めた。第一番に千代丸は黃
 金山の近くに沈んだのだ。處で中佐は福井丸を指揮して、千代
 丸の沈みかゝるを側に眺めながら、ズツと通り抜けて『さあ
 よし』といふので、かねぐ自分の弟の様に可愛がつて居た部
 下の杉野兵曹長に『杉野、直火薬に點火するのだ』と命じると
 剛勇無双の杉野は、一言の下に『畏まりました』と答へて、や

がて、點火の爲めに下に降りて行ッた所が、此時遅く彼の時早く、敵から發射した魚形水雷は、波を衝いて驀進し來たと見る間に忽ち福井丸に命中したから堪らない、船は忽ち爆發した、中佐は、之を見て『甘く行つた、さあ皆、端艇に乗り込んだ乗り込んだ』と指揮して、自分は一番後で乗り移り、いざ引き揚げようとした所が、『これはどうだ、杉野が見えないじゃないかどうした』といふ騒ぎ『まさか、戦死じやあるまい』といふので中佐は、又元の船に引き返して、方々尋ねたが、見えないから端艇に來ると矢張居ない。『はて、戦死かな夫では、せめて死骸でも見付けて來よう』といって丁度三度も引き返し、隅から隅まで探したがとうく見當らない。其中船はだんく

沈みかゝる敵からは絶えず大砲が来る、仕方なしに思ひ切つて引き揚げることゝした、杉野兵曹長は、全く魚形水雷にかゝつた時、勇壯比なき戦死をしたのであったのだ、此

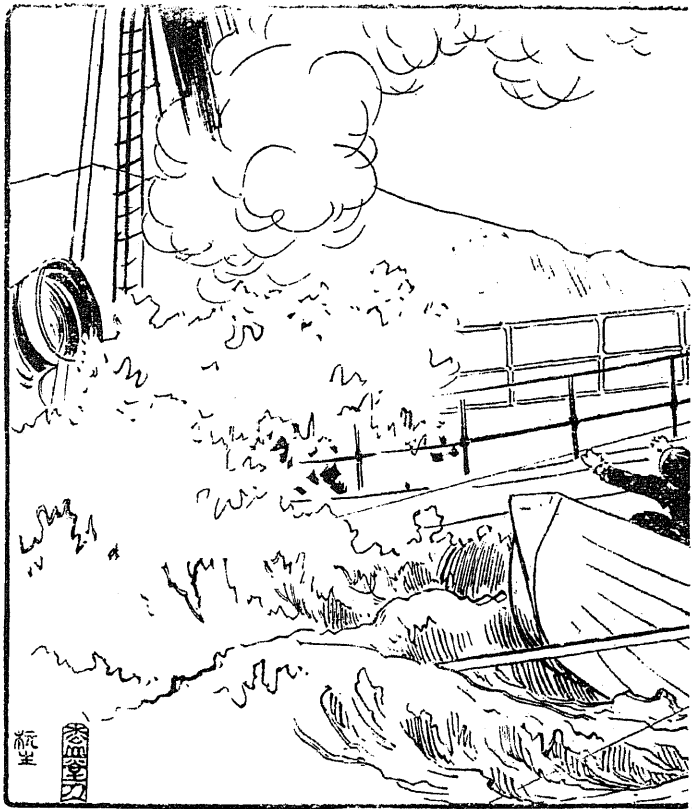


時には、もう他の三艘もすっかり沈んで其決死隊も皆夫れく漕ぎ返つて仕舞つて残るはたゞ福井丸の端艇ばかり

なもんだか
ら、この端
艇を目がけ
て、敵から
射撃ち出す
大砲小銃は
雨霞の様に
忽ち中央に
漕いで居た
小池機關兵
弁んで艇尾に

居った筈なのに、

暫くして一人の水兵が頭から顔



は飛び來つ
た十二听砲
彈の爲めに
打ち貫かれ
て其場に即
死した。此
時中佐は地
圖を手を持
ち、栗田大
機關士と相

にかけて、一面にサッと潮をあひせかけられたと思つて其の拍子にふり向ひて見ると、こは如何に中佐は兩手を垂れて俯くよと見る間もなく忽ち激浪の中に墜落して仕舞つた。後には、二錢銅貨程の肉の塊と、血だらけの地圖とが残つて居る許り、前の水兵が潮水を浴びたと思つたのは全く忠勇武烈の中佐が血潮であつたのだ。續いて、栗田大機關士、菅沼兵曹も傷いたが、兵曹は、やがて驅逐艦霞に救ひ上げられる時、一聲高く『帝國萬歳』と叫んで息絶した。

鬼中佐が、壯烈極まりなき最期を遂げた有様はざつと、この通りだ。

さて其朝になつて何れも『霞』に引き揚げられたが、悲しいでは

ないか、今迄、一同が神とも頼んだ指揮官廣瀬中佐は杉野兵曹長ともに、もはや其姿を止めない。さすがに、覺悟は極めて居たとはいふものゝ、何しろ、軍人の手本といはれた中佐の事だから、中佐の戦死は誰一人惜まぬはなかつた。かくて、中佐の遺骸、といつても一片の肉塊ではあるが………は、うやくしく東京に捧送され、四月十三日 水交社で、盛なる葬儀を営まれたが、畏くも陛下よりは勅使を御差し遣はし下すつたといふのは、中佐死後の名譽此上はあるまい。中佐は、かくて、名譽の戦死を遂げられたが、併し中佐の戦死は、内に在つて我國民の元氣を鼓舞することはどの位だが知れないと同時に、外に向つては、所謂 日本軍人の大和魂を明に

世界萬國に示したといつてよい。これでこそ、一死酬國、七生

護皇といふ中佐の志を達したといふべきだ。
さあ、これでお仕舞ひだ、太郎さん どうだ面白かったか、
ちゃんも分ったかね 總

太『あゝ、面白かった、豪いなあ、廣瀬中佐は

總『まあ、お父さん 中々、お話が甘い事ね

母『太郎さんも、今に大きくなって中佐のようになるのだらう

(おしまい)

水雷のお話

海軍で軍艦を攻撃するには、先づ大砲と水雷とですが、其中でも殊に水雷の力の恐ろしいことは、彼の日清戦役に、威海衛の敵艦をうち破つた事や又今回の戦争でも、レトウキザンの横腹に、大きな穴を明けてやつたり、旗艦ベトロボヴスク號を、司令官マカロフ中將をのせた儘、八百人の士官水兵と共に、瞬く間に撃沈したので分ります、そこで、今度は、簡単に水雷のお話をして見る事に致しましょう。

水雷の種類

には二つあります。一は攻撃水雷といひまして、一は防禦水雷といひます。何れも、種々な装置の中に火薬を詰め込んで、其爆發力で敵の軍艦を轟沈させるのです。一體、ベトロボヴスクの様な、一萬何千噸といふ様な戦闘

艦になりますと、中々大砲の丸の五發や六發當つたからといつて、言はゞ象の身體を蜂が刺した様に、平氣なもんですから、どうしても此水雷で、粉微塵に粉碎して仕舞はねばなりません。然し、ベトロボヴスク號の轟沈されたのは、全く我軍の敷設した、

機械水雷

にかゝつたのでありまして、この機械水雷は、どつちかといふと、防禦水雷に屬するのですが、今度の様に、此方から行つて敵の場所へ敷設する様にしますと攻撃水雷といつてもよろしいでしょう。これにも、いろいろ種類がありまして、一は海底に沈めて置いて、敵艦が其處を通過する時、之に電氣をかけて爆發させるので、今一は觸發水雷といつて、敷設した水雷に軍艦が觸接すると忽ち爆發する仕掛けになつて居ます。

さて、以前は、水雷といふと、この様に一定つた場所へ据へ付ける機械水雷許りで在つたのです。が、今から凡そ四十年前程前に、奥國のホワイヘツドといふ人が始めて、

攻撃水雷 即ち此方から進んで行つて敵艦に當つて爆發する魚形水雷を發明しましたが、之を一番早く海軍に應用したのは英國で、夫から、だん／＼改良に改良を加へられて來ましたが、今日ではこの魚形水雷の速力といつたら、すばらしい早いもので、僅か一分間に大凡そ八町から九町も走つて行くとして、甘く敵艦に命中すると、鐵であらうが、木であらうが、上下四方に三十呎からの大穴をうち明けるのですから、どんな大きな軍艦だつて、とても之には閉口せざるを得ないので、日本では、此水雷攻撃で、日清戦争にも、今

度の戦争にも、世界の耳目を轟かす程の大勝を得ましたが、實際、之からの海戦は

水雷艇 の襲撃が第一番だと申すことは、露西亞の敗將マカロフなどの常に曰つて居たといふ事です。この水雷艇は、なるべく見付からぬ様にして、敵艦に近づいて行つて、水雷を發射するに都合のよい距離、凡そ、八百碼から千碼の所まで進んだ時に之を發射するのである。大きさは大抵、小さいので二十噸以下、大きいので百二十噸或は夫以上位のものであります。ですから、水雷艇の攻撃は、彼の威海衛陥落の時や、今度の第一回旅順攻撃の時の様に、暗夜とか、霧の深い時とか、又は大砲の煙で濛々として居る時が最も妙なのです。苦し敵に見付かりでもすると、全體小さな艇ですから、一撃の大砲で打ち沈められて仕舞ひま

す。そこで、戦争中此の水雷艇を驅逐して、味方

の艦隊を守護するものは

水雷驅逐艦

といつて、通例、二百五十噸か

ら三百五十噸位の軍艦です。水雷艇を驅逐して撃沈しようとするのですから、速力も水雷艇以上で

三十六哩も走ります。

水雷母艦

といふは、水雷艇は小さくていろ

くの軍需品、石炭とか飲食物とかを積み込むことか出来ない所から、水雷艇に之等を供給する爲めに運送の用をなす船をいふのであります。

小學校の茶話會

毎年、附屬小學校では、卒業式が済んだ後で、一部、二部、三部の卒業生と、先生方とが集つて、二階の講堂で茶話會を開くことになつて居ます。

今年も、三月廿八日の午前九時に卒業式が行はれましたから、其お晝から、茶話會を開きました。卒業の男女生から、いろ／＼面白／＼お話が出ました、覺えて居るだけ、三つ四つ記さ出して御覽に入れましょう。

まづ、こんなお話です、

田舎者と足袋屋

田舎者が、東京の足袋屋へ来て、足袋を注文しました。足袋屋の主人が「十文ですか、十一文ですか」と尋ねましたら「イー、田舎もんです」と答へました。

田舎者と汁粉

田舎者が、お汁粉屋へ飛び込んで「オイ、汁粉を下さい」といひましたから、汁粉屋の女が「ハイ、御膳にしましよつか」と聞きましたら、「イーヤ、

汁粉だ」といひますから、夫では『田舎に致しませうか』と言ひましたら、「何だ、人を馬鹿にしてゐる、それでも、東京へは、度々出て來た事があるのだぞ」

大黒天と鼠

或晩、大黒様が御馳走をしようと思つて、ドル箱を明けて見た所が、お金がたつた二錢五厘しかありませんでした。之では、とてもお魚を買うことは出來ないと思つて、仕方なしに大根を買つて來て食べました。そこで、つく／＼考へて、まあ、大黒天ともある者が、いかに貧乏すればとて、大根を食べなければならぬ様にもなつたかと思つて歎いて居りますと、鼠が、天井から申しますには「夫は致し方がありませんよ、世間では、あなたの事を、ダイコクと申しますから」

ハイカラと帽子

大變なハイカラの男がありまして、どうしたら、頭の髪を際立つて分けることが出來ようかと、友人に尋ねましたら『夫は、漆を塗ればよい』と教へられましたので、すぐ漆を買いに行きました。間違つて、膠を買つて來ました。さて、夫を溶かして、熱いのを辛棒して頭に塗りつけて分けまして、さて、帽子を被つて出かけました。所が、途中で友達に遭ひまして、其友達は帽子を取つて、お辭義をしましたから、此方も帽を取らうとしたが、チャンと膠でクツツイで仕舞つて、どうしても取ることが出來ないから、仕方なしに帽子を冠つた儘でお辭義をしました所が、其友達は「大變腹を立て、此奴、生意氣な失敬な男だ」と思つて、側へ來て、帽子に手をかけて、無理に脱かせよう

としました。そこで、膠で固着して居るのを無理に脱がせたんですから、帽子の皮だけが脱れて、中の方は、矢張頭について残つて居ましたから、『オヤ〜』といつて諦めましたと云ふ。

なさけない

お婆さんが、川へ菜と酒とを洗ひに行きました所が、大水が出て来て、二つとも流されたので、ナサケナイと言つて泣きました。

いそつぶ物語

(五十五) 百姓の親子

一人の百姓が死際になりまして、どうか子供等にも自分と同じ様に精出して畑を耕作す様にさせたいものだと思へまして、さて、大勢の子供を枕元に呼びよせて次の様に咄しました。

『已は、お前方には誰にも知らさないで、家の畑の中へ、非常な寶物を埋めて置いたから、お前方誰でも掘り出したものに、形見として上げよう』と云ふ言置きをして死にました。其處で、子供等は、吾こそ其寶物を掘り出さうといつて、各自、鍬や鋤を以て来て、丁寧に畑を、あちらこちらと掘り返して見ましたが、何一つ寶物らしいものが出ませんでした。然しながら、其お蔭で、其年の作物は非常な豊作でありましたと云ふ。

(五十六) 鶏と鷺

二羽の雄鶏が、或日、畑で以て烈しく蹴合を始めました。そして、終に一羽の鶏が勝つて、一羽の鶏は小さくなつて、片隅へ隠れました。そうすると、此勝利者は、高い垣根へ飛び上つて、兩方の羽をたゝいて、力一杯に勇ましく凱歌ひました。

所へ一羽の大鷲が、風を切つて舞ひ下つたと思ふと、忽ち此勝利者を爪に引つ掛けて、再び虚空遙に飛び去りました。

傲慢の後には滅亡が來ます。

(五十七)

狐と猿

或時、森の中で獸の集會がありました、其席上で猿が、いろ／＼の藝當をして多勢の獸どもを喜ばせました所から、とう／＼皆が、相談をして猿を獸仲間の王様にする事に決めました。すると、狐が猿の名譽を嫉んで、或晩、係蹄に一片の肉のかゝつて居るのを見付けて來て、そして猿に申しますには『私は、今御馳走を見付けて來ましたが、先づ王様に上げたいと思ひまして食べずに置きましたから、どうか、一所に來て食べて下さいまし』そこで、猿は『そうか、それはありがたい』

といつて、其場所へ行き、何の氣なしに食べようとして忽ち係蹄に引つかゝつて仕舞ひましたから、非常に怒り出して、何故人を欺かして、こんな目に遭はした、さあ承知しないといつて、狐に食つてかゝりますと、狐は、片頬に微笑みながら、『オイ猿さん、君は、そんな氣で居て、吾々獸社會の王にならうなんて、とても柄にないじゃないか』

(五十八)

腹と手足等

或時、人間の手や足や目や口等が、腹に向つて不平を鳴りました。一體、腹といふ奴は、怪しからぬ。日がな一日何もしないで遊んで居て、そして、一人で甘いものを食つて贅澤を極めて居る、吾々が、毎日働いて、彼の爲に汗水になつて働いてやるのは如何にも馬鹿らしい話でないか』といふ

ので、とう／＼皆が全盟罷工をやつて一切身體を助けないことに決めました。所が、忽ちにして全身、衰弱に陥つて仕舞ひました。そこで手や足や目や口等が、あゝ馬鹿なことをしたといつて、後悔しました。もう、後れしました。

はととぎすほどととぎすぎすぎすに
まづまつわれにはつねきかせよ、

閉塞隊勇士の行狀

眞個に大事業を成し遂げようとする人に限つて、平生の行狀は屹度立派なのが多い。平生、亂暴をやつたり、禮儀などを構はない様な人は、大抵はさうと云ふ場合に大きな事業は出来ないです。其證據は、今度の我海軍閉塞決死隊の人々の平素の

行はどうかといふ事につきて、或る士官の申されましたには、皆沈着にして禮儀を重んじ、かりそめにも軍隊の規律などを犯す様なのはなく、海軍では行狀は四等に別れて、一番宜いのを一等として居るが、多くは皆一等の行狀點を持つて居る人たちで、酒を飲んで亂暴をしたり、肩を張り、臂を怒らして人と衝き當つて喧嘩をする様な連中は一人もなかつたといふ事です。そして、此任務を果すに付きては、一生懸命職務に勉勵した事は勿論ですが、任務を終へて歸つて來ても、決して、自分たちの功を誇るといふ風はなかつたといふ事です。まことに感心な話ではありませんか。

婦人と子ども



盲啞教育の起源

小西 信 八

此戰國多事の時に當りまして、私共フレーベル氏の紀念日に當つて、フレーベル會を靜かに催すとの出来るは御同慶と思ひます、二三日前の新聞に見ますと、敗戦の結果を聞かれて露西亞の皇后は禮拜所で泣かれましたと云ふことで、これが若しアペコベに東郷艦隊が全滅したと云ふならば、吾々はどういふ様に騒いで、皆さんと此に集つてフレーベル氏の爲めに會を催すといふことなどは出来ぬ

と云ふ事を思へば、實に手の舞ひ足の踏むを覚えぬと云ふ嬉しみがあゝと思ふ、此頃此に出てお話をせよと云ふことを承りまして、殊に幼稚園と云ふことは熱心に好んで居りました事でござりますから、喜んで御話を致す積りであつたが、奈何せんもう十四五年前の事で、トンと此方に来て見ること出来ず、他の幼稚園を見ることも出来ず、時々此方で拜見するだけで、此に來て幼稚園に因みのわる様な話は出来ぬから再三お断りをして見たのである、見たのでない本氣にお断りしたのである、けれども中々御使の方が御如才がござりませぬ、到頭引出さるゝ様になりまして甚だ男甲斐もないと思ひました、併し乍ら、これもフレーベルの爲めと思ふて負けて参りましたのであります、常ならば中々負けはせぬのである。併し昨晩までトンと忘れて仕舞ふたのはまことに申譯がござりませぬ、私は幼稚園の事は話されぬでも、セメて子供の事に就ては、私が幾らかこれまで従事して居ることで御参考になることを申上げたならば、矢張りフレーベル氏に對して申譯になることと思ひます、私の生徒が目が見えなくなつた原因と耳の聞えなくなつた原因を調べて居ります、其事を話さうかと思ひました所が丁度、婦人と子供の一號かに出て居ります、お顔を見れば四五年前の方々とは違つて居らうから話さうかと思つたが、併し雑誌に出たものを言ふことも良心に咎めて出来ぬで、急に話の題を改めて、これならば皆さんにお話をした覚えがござりませぬから、大奮發でお話が出来ると思ふて、フレーベル會に縁は近くはないが差支へないかと思ふて、お話をすることに致しました。それは盲人の教育と

聾人の教育の起つたことで、これから子供のお世話をなさる上に子供にお話を下されても、其次に又盲人聾人を可愛がつて下さる様にと思つて出ました。

昨年八月末の調によりやすと、幼稚園の数は師範學校に附屬が十一で、市町村に立つたが百七十三、私で立てゝ居るが七十九、都合二百六十三ある、大した事になつて居ります。保母の數も師範學校在職が十九、町村の幼稚園の保母の方が五百十八人、私立幼稚園に百八十九人、子供の數が師範學校附屬の數が八百三十六人、市町村の幼稚園の子供が一萬八千六十五人、私立幼稚園の子供の數が四千七百四十四人、都合子供の總計が二萬四千八百八十五人、これ程の昨年の三月の數であります。多いとは申しましたが小學校の數に比ぶればまことに少い、子供も少いでござりますから、これもモツト澤山に殖れば宜からうと思ひますが、併し、これとても唯々並みの人のばかりでありまして、耳の聞えぬ目の見えぬ、者の爲めには一つの幼稚園もないと申すは實に殘念と思ひます。これはどうか皆さんに御盡力を願つて、西洋の様に何處の盲人の學校にも、聾人の學校にも、此方の學校にも幼稚園の附屬の出来る様にして欲しいと思ひます。それには盲人を可愛がつて見やう、聾人を可愛がつて見やうと云ふ人が出来ねは出来ぬと思ふ、これは皆さんに願つて置いて宜い事と思ひます。

これからお約束したお話をしたいと思ひますが、佛蘭西には普佛戰爭で大敗北を致した爲めに、世界から忘れられたる如くに一時は信用を失つて、それまでは日本の軍隊なども佛蘭西の眞似をしてやつ

たが後には獨逸式に移るといふ風で、佛蘭西の方は殆んど忘れられたかの如くに氣の毒に思つた事
 もあります、けれども、其實、中々學問と云ひ凡ての事が獨逸に劣らぬ進歩して居る。他の事は知りま
 せぬが、唯々人の話でござりますが、彼の盲人の教育と、啞人の教育とは今日佛蘭西が元祖の國として
 尊敬せられて居るのであります、併し乍ら今から五百年程前はまだ野蠻人と云つて笑ふ程の資格は具
 へて居なかつたかの様に思はれます、それは千八百二十五年で、(日本では龜山上皇の崩御の翌年)チャ
 ールス七世の御代、四人の盲人に甲冑を着けさせまして棍棒を以て大なる柵を結び廻はして、其内に
 大なる豕を放して之を打殺した者に豕を取らせると云つて、途法もない、其盲人は豕を欲しいかドウ
 か知らぬが、豕を打たせてお互に打合つたりするを見て、朝野の人は少しも氣の毒と思はぬで居つた
 と云ふ、如何にも人道に外づれた所爲でないかと思ふ。下つて千七百八十三年、これは日本と對照す
 れば紀元二千四百四十三年、天明三年塙保己一先生が辛苦して拵へた群書類從の出來上つた翌年で、
 淺間山の噴火した年であります、さういふ近い年であつて今から二百年ばかり、巴里の町の大通りの
 或る居酒屋の主人が、十人の盲人を長い卓子に並べて音樂の書物を読んで居るかの如くに眞似とさせ
 て、音譜の本などを見てゐるかの如くに並べてある、さうして側の附いた眼鏡を掛けて種々の樂器を持
 つて、打つたり、叩いたり、叩いたりして、其調子の揃はずして可笑い音をさせるに由つて客を引い
 て居る、さうすると往來の人が不思議な音をさせて騒いで居るから、何かと思ふて覗いて見ると種々

飾つてゐる、そこで知らず／＼足が踏み込んで、一盃々々又一盃で遂に奥に乗じて財布の空になることも知らぬで、盲人さんの調子外づれの音楽を聞いて居つたと、さうして主人は想はぬ儲けをして客の財布が空になり、主人の財布は満つると云ふことがあつた、然し斯ういふ人情に外れた事を何時までも看逃すものでない、たま／＼其處を通りかけた者がある、其名はワランタン、アユイと云ふ人で、如何にも人情に外づれた惡むべき仕業であると嘆息しまして、ドウかして此盲人の爲めに救つてやる工夫をしたいものである、世の中の人に玩ばるゝと云ふことのない様にしてやりたいものであると考へました。さう思つて居る矢先きに、或日會堂に出掛けると、其會堂の門内にルンと云ふ盲人がゐる、下んなさへと云つて出した其手を押へて、毎日斯うして幾ら貰へば宜いのであると云ふと、幾ら／＼と云ふ、それでは、それだけを毎日お前に遣るから、私の言ふ事を聞いて私の處に來いと云ふことで連れて歸りました、其ルンは天稟優れたものと見えて、何を教へても能くする、これが抑も盲人を教ふるに云ふ事の初めである。其前に勿論、ルン九世がイヂプト遠征に行つて、熱砂に依つて目を潰した者を養ふ爲めに、三百人の盲人を養ふて盲人の養育院が出来たといふこともある。併しそれは食べさせるだけで、教育するのではない、盲人を教育することは、全くルンが始めである、其處で種々教ふることを工夫しましたが、誰でも此盲人に教へやうと云つて、手を着ける時には先づ／＼ドウして教へるかと思ふことが第一の問題であると思ふ。此ワランタン、アユイもドウしたならば讀み書きが

教へらるゝかと考へた末、木を組んで教ふると云ふことをやつたものと見える、ところが、或日此所
 ンがアユイの机にあるものを取つて来いと言はれて搜して居ると、彼方では、人の來た時に持つて
 來た名札を籠の中に入れて置く、それをイデリて見たらしい、所が此印刷の強い爲めに、名刺の後ろ
 の方に字が高く出て居る〇の字を見て、これは〇の字でないかと云ひました。そこでアユイは非常に
 喜んで我事成れりと言つたと云ふことである、ドウして教ふれば宜いか、ドウして教ふれば宜いかと
 思ふて居つたものであるから、一寸した事が考への本になる、それから、突字が出來たのである、これ
 からして盲人に教ふことが大變に樂になつたと云ふことである。

突字は今の様な偶然の出來事からして工夫が出來たのであります、左様にして面白く續いて居ります
 と、千七百九十一年に、革命の爲めに慈善會中の者が、或は牢屋に投げらるゝ者もあり、或は追放され
 る者もあり、首を刎ねらるゝ者もあり、大騒ぎになつた、學校は國庫から支辨して貰ふことになつた
 けれども、間もなく亂民の爲めに、さういふ事をするものが出來ずして、名ばかり政府支辨の學校で
 あれども、政府から金を貰ふことは出來ずして、僅かの自分の持つて居る財産を悉く出して、それが
 盡きた時は、生徒と一緒に印刷所に行つて、印刷に従事して一緒に錢を取つて二十六人の子供に食べ
 させたり着せたりした、中には一日一度しか食べないで、目の見えぬ者が飢渴を感じぬ様にした、所
 が千八百一年、此學校に大打撃が落ちて來た、それは先刻申しました三百人の盲人の養育院と、此學

校が合併せねばならぬと云ふ政府の命令である、イチフト遠征の爲めに出来た養育院、其中には随分
 非道い、譯の分らぬ者がある、其中へ以ていつて將來に望みある盲人の者を一緒にして置くはアユイ
 の堪ふことの出来ない苦であつた、今まで規律正しく教育した者を一緒にして教ふると云ふことは
 出来ずして、悪いことばかり聞いたり、眞似たりするからそれを見るに恐びないでとう／＼校長の職
 を辭して自分で學校を開きました。これは三年程の間續いて居つたが、維持が出来切れないでした。
 其中露西亞の皇帝から招かれて、途中伯林の皇帝から款待を受けて露西亞に居ること十三年、それに
 參つて失望したは、皇帝は盲人を教育しやうと云ふ難有い思召であつたか、どうも政府の人々が盲人
 を集めることをしない。ドウいふものと尋ねると露西亞には盲人は無いと云ふ、大變失望させて仕
 舞ふた、それで千八百六年露西亞皇帝の所に參つてから、十三年程居つたが、段々年も取つて故郷に
 歸りたいと云ふ念が切實であつて、露西亞皇帝に暇を貰ふて、其時に皇帝が訣るゝに恐びぬで、何度
 も抱き締めて、高い勳章を賜はつたりしました、朝廷の御役人からは冷かなる待遇に逢ひました、
 歸りますと直ぐに家にも寄らぬで（自分の家はないが兄の家があつた）直ぐに學校に行つた、然るに
 其時の校長は、如何にも了簡の狭い校長であつたと見えて、其學校の創業者の大恩人が十三年も留守
 にして歸つたと云ふに、ヤレ來たと云つて歓迎するかと思ひの他、ボルボン朝廷に對して反逆をした
 人であるから、入れてはならぬと云つて突き返へしました、決して反逆の仲間に入つたのでないけ

れども、さういふ事を言つて、自分の學校の創業者を追ひ出して仕舞ふた、それを職員生徒が聞いて沸騰して其校長は遂に辭職せねばならぬ様になつたといふ事です。其次に校長になつたはフケクニと云ふ人でありました、これは此アユイの盲人の爲めに骨を折つたことで、其成功の著しいことを認めて年取つて何時此人の身に不幸が来るかも知れぬと云つて、懷舊會とでも云ふ様な、此人の徳を懷ふての大音楽會を催しました、さうして朝野の人を招き、舊の卒業生の唱歌をやりました、盲人の父と云ふ題で以て、此人が學校を建る時の此艱難辛苦を入れてさうして成功した事を歌ふたのである處がそれを歌ふとアユイはどうか夫は止めて呉れ、さう私を賞めて呉れるな、私の功でない、神のしたのであると言つて其唱歌を止めさせたと云ふことである、自分の功を誇らぬで神に歸したと云ふ、それは千八百二十一年、それ程に喜びましたが、聞くに堪へないで止めさせた程感極つた、それから翌年の三月に遂に亡くなりました、

此人の精神と云ふものは、歐米各國に、更に遠く東洋の日本までも傳はつて、今の讀み書きが出来る様になりましたことは直接には他に骨を折つた人もあらうが、遠く言へば此佛蘭西のアユイの功といはねばならぬ、然し只今此方の學校はアユイの字でない、夫は高い字であるから書くことが出来れば讀むことが出来ぬ、讀むことが出来れば書くことが出来ぬといふ不便があるのです。ところがアユイの後で、矢張り佛蘭西の盲人でルイ、ブレユと云ふ盲人がある、此人はアユイの學校を卒業して、ド

ウかして盲人に自分の手で書いたり、讀んだりする様にしてやりたいといふ考で、自分が其學校で教へを受けた經驗から、斯うしたならば宜いとか、アーしたならば、宜いとか種々工夫を凝らしましたが、或時歩兵大佐のボツ／＼字を突いたものを見て、これは宜いこれ程宜いものはないと考へた。然しそれは數が多くて十二ある、それではいかぬと云ふので六點にした、日本のは盲啞學校の石川倉次といふ人が三年程苦んで面目を改めました、殆んど發明したと言つても宜い程である、モツと此人の事に就てお話をすればあるが主意でござりませぬからそれ程にして置きます。

又啞人の方、の教育は、ドレーターといふ人に始まりまして、これも佛蘭西が元祖であります、此ドレーターといふ人は千七百十二年に生れて八十九年に亡くなつた人であります、此人はドウして啞人を教育することになつたか、これは佛蘭西のベルサイユと云ふ所の貴族の人でありまして、僧侶になる教育を受けた、或時朋友の所に行つて女兄弟子供が針仕事をして居る或時話をしかけたが返辭をせぬ、どうした事と思ふて友人に話すと、先頃まで何の何某と云ふ者が世話をして教へて呉れたが一週間前に病氣で亡くなつた後斯うして始終來て居るけれども、吾々は何と教へて宜いか判らぬで誠に氣の毒に堪へぬで居るといふ。それを聞てドレーターは、さういふ不幸な人を教ふるは神の意に適ふのであると言つて、そこで其者を預つて、これまで聾啞を教ふる經驗はなかつたが、熱心に工夫してやつて見ると中々成績が著しいので、それを聞き及んで、所々方々から生徒を連れて頼みに來て、

遂に六十何人となつて、自分の家に入れ切れないで、特別に家を借りて教ふると云ふことになつた、併し乍ら此人は一も政府からも保護を仰かず、他人からも金を出して貰ふたのでありませぬ、皆自分の財産、其財産は祖父さん、親翁さんから引請けた財産が年々七千磅先づ七千圓、其内千圓自分の爲めの用に取つて、後と六千圓啞人の爲めに使つて、唯で食べさせ、唯で教へる、それ故に非常の儉約をせねばならなかつたのです、然し此に又ドレーターと云ふ人の貴ぶべき性質は、富貴の人が頼んで來れば預るけれども、元來富貴の人は己れ一人で教師を雇ふても出来る、故に富貴の人を教ふるが主意でない、我は親達が授業料を拂ふて教ふることの出来ぬ子供を取るものである、といつて居りました。富貴の人の子供の来るは拒みもせぬが喜びもせぬ、これが貴い、兎角、吾々でも、能く出来る子供は前に置いて、手がかゝつて一番教師が面倒を見ねばならぬのは棄て、置く様になる、穢い着物を着て居る者は餘計世話をせねばならぬが手が出ぬ、ドレーターはさうでない、金の無い所の子供は餘計に世話をせねばならぬ、といふ。世の中には種々の人もありますが、此人ばかりは少しも利己主義のなかつた人であります。或年大變これまでに云ふ嚴寒の年がありました、其年には七十三歳と云ふ高齢で、日本ならば七十七の祝をするに云ふ時に、ブル／＼震へて、白の落るも拂はぬで教へて居つた、すると六十何人が泣き出して、貴方が私等の爲めに勘辨して、火も焚さずに居らるゝ、貴方が居られねば私共はドウしませう、モウ少し身体を大切にしてお下さればならぬ、と云つて泣いて言つ

たと云ふので其爲めにストーブを焚いたと云ふことである、それ程までに啞の子供を可愛がつたのであります。併し乍らドレーターと云ふ人の教へ方は手眞似が主意である、太陽とか、水とか、何でも手眞似である、初めは發音を教へたのでありますでしたが、成績が好くないと云ふので手眞似で教へた、此は佛蘭西で最も行はれたので又佛蘭西法とも云ひます、其處でドレーターの成績が四方に聞えて、露西亞の皇后さんや、奥西太利の皇后さんから澤山お金を遣るから自分の國に來て教へて呉れと言はれたが皆斷つて、私の仕事に御目が留つたならば金を下さるよりも貴方の國の啞を教ふる教師を御寄越しなさい、さうすれば知つて居るだけを教へる、其方がお爲めになる、私の様な何時墓に入るか知れぬものにお金も要らぬ、又餘所の國に行つて功を立てやうと云ふ望みもない、私の仕事がお認めがござりますならば教師を寄越しなさいと言つた、それから澳太利から二人よこされた、故に此國では佛蘭西の如く手眞似が行はれて居る、諸君が御覽になれば手眞似は如何にも見苦しい、千八百八十年に伊太利のミランと云ふ所に歐羅巴大陸の盲啞教師が寄りまして、佛蘭西法と獨逸法と何れか宜しかか、といふことの會議がありました、其時、佛蘭西の手眞似の法が否決されて獨逸の發音法でなければならぬと云ふことに決しました、それには種々事情がある、伊太利であるから伊太利の人か多かつたとか、又佛蘭西法の代表者の説明が不充分であつたとか云ふ事などの爲でしょう。けれども發音法でなければならぬと云ふので、今まで手眞似でやつて居つた教師には止めさせて、元祖の佛蘭西ま

で發音に返つて仕舞ふた、獨逸法はサミウル、ハイテツケと云ふ人、此人が發音で教へねば充分なことは出来ぬと云ふことを云ひました、それがサクソンの王様に聘せられて、今は獨逸に百に近い陸の教育法は皆發音法である、英吉利でも亞米利加でも段々發音を主張して、今新しく立つる學校は發音々々で、古い學校も發音を加へたと云つて廣告をする様になつて居る、然し手眞似の法は形の上では廢せられて居るけれども、雙陸ばかり寄つた時は手眞似でやる方が都合が宜いから、先生の居られぬ時は手眞似で話す、私が彼方に行つた時に、向うは獨逸、此方は佛蘭西で手眞似を使つて、少しも不便はなかつた、故に手眞似といふことは決して馬鹿に出来ない、之を急に禁するは殘酷な様に思ふ。けれども吾々は發音を輕蔑するにあらず、けれども手眞似がならぬと云ふは吾々に日本語を使ふとはならぬと云ふと同じ感情を有たしむるであらうと思ふのです。斯ういふ譯でドレーターの手眞似法は、ハイテツケの發音法に勝を譲りました、然し其廉潔と云ふ點に於ては一番高い地位を占める、ハイテツケは少し利己主義の人で、尊貴の子供を取り月謝を澤山取つて非難を受けたといふ様なんです、ドレーターの德行は他の人の企て及ぶことの出来ない所であつたと思ひます、若し教育社會に於きましても先刻から申しましたドレーターとかアユイと云ふ様ふ人ばかりならば、一昨年あたり起つた教育社會の騒ぎなどはなかつたらうと思はれますに、殘念な事であります。どうかして此ドレーター、アユイの様な考へばかり持ちたいものと思ひます、皆さん少しい時から、さういふ高潔の心を持つ

様に子供を教育することを皆さんに希望致しても、無理ではあるまいと思ひます。

其處でこれは聾人を教育する事のみでありますが、私の學校には芝から通ふもあり、或は淺草から通ふもある、これは子供に罪はないが、盲人按摩と云つて、杖を取つて投げたりする、盲人の人に對して眞に氣の毒である、この様なことは幼稚園の子供の時から、盲人は親切にせねばならぬ、手を引きてやらねばならぬとか、氣の毒に思ふて親切に世話をせねばならぬものと云ふことを充分御世話を願ひたいと思ふ、兎角子供は跛の人とか身體の具はらぬ人を見るとじつと見て居る、それは宜くない、まだ黙つて見て居るは宜ひがアラ〜と言つたりする、子供であれば仕方がないが、教育の足らぬ證據と云ふ非難は免かれぬ、穢い着物を着て居る人を見てじつと見て居ることのない様に、不具者を見てもじつと見て居る様なことのない様にせねばならぬと思ふ、今の盲啞學校の築地にあつた時、文部次官の奥様が大きな菓子袋を持つて來られて、それから分けてやつて、實にこれは盲人の前で言ふ事でないと思ふたことは、赤いのは女の子に遣れと言はれた、それは常に私が生徒に對する上からして、生徒はマサカに不公平にして私が女の子の方に最負して旨いものを遣ると云ふことは思はぬであつたが、夫でも其時に盲人の顔が非常に變つた、其菓子は梅の花の菓子で紅と白であつた、形も味も同じである、唯、赤いのを女の子の方に遣れと言つた時に、これは言ひ損つたと思つた、さういふ細い所までは實際盲啞にたづさはらねば判らぬが、盲啞は可愛がつてやらねばならぬ、親切にせねばならぬと云

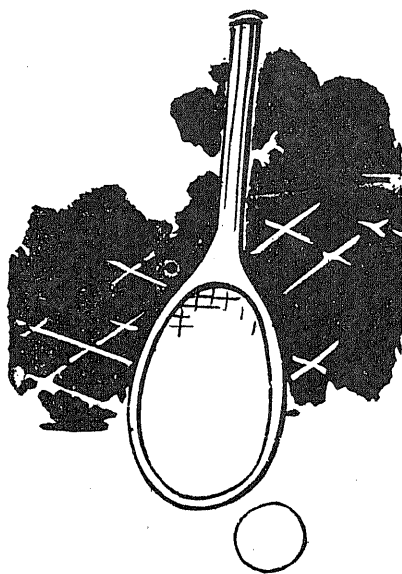
ふこと又は易い事と思ふ、此際獨立の盲啞學校を建るなど云ふことは野暴であるから請求せぬが、セ
 マて出来る所では小學校の引けた後なりに、小學校の先生が其近所の盲人を教へてやると云ふことが
 工夫が附けば、何の様に盲人の爲めになるか、啞人の爲めになるかと思ひます、これは私の發明では
 ありません、亞米利加には澤山あります、英吉利の倫敦には啞兒の學校が十八ある、盲人の學校は十
 ほどある、盲人でもなく、啞兒でもなく併し乍ら並みの者でない早く言へば馬鹿であるが、馬鹿でも
 ないが惻口として取れぬ、其類の者の學校が三十一ある、盲人、聾、啞と云つて馬鹿にすることがな
 いかと云ふて聞くと決してない、氣の毒だ、親切にしてやらねばならぬと云つて、手を引いたり物
 を落せば拾ふてやるとか云ふ様に、同情心を養ふに餘程宜いと云ふことである、近くは日本にも長野
 市の小學校に啞人と盲人とを教ふる所がある、福島にも一つあります、仙臺の師範學校にもあります、
 手紙を遣つて聞くと倫敦と同じで、彼處へ遣れば擲られやうとか輕蔑せらるゝとか云ふことはない、
 これは吾々の豫想よりも好いと云ふことである、殊に東京市などには盲人の學校も啞人の學校もあり
 ませぬ、大阪京都にはありますが、此東京市に一つ位はなければならぬと思ふが、文部省の學校に一
 任して居る、東京市の盲啞の生徒は八十何人居る、けれども財政の都合もあつて、俄に出來ぬとして
 も、有志の人が我が公務の後で世話をして見やうと云ふ人があれば、何處の管理者でも世話をすると
 思ふ、

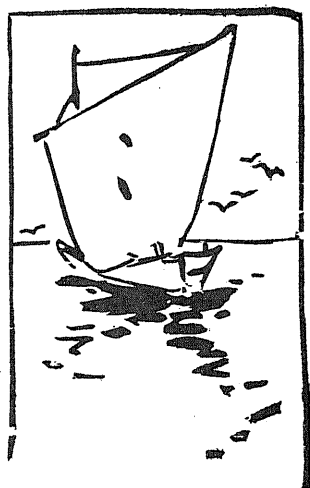
もう一つ終りに申したいことは、これは少し話の質が違ふが、盲人を可愛がつて貰ひたいと云ふことの例として申します。スキツランドの博物學者にヒューバと云ふ人があるこれは一千七百五十年に生れた人で、丁年の前に夜學に依つて遂に眼を失つた、其前に代官の娘のセチバと云ふ愛敬すべき娘に可愛がられて、卒業の後には結婚しやうと云ふことの約束をして、兩親の許しも得て居りました。ところが眼の見えなくなつたと云ふことを聞て代官か、娘に前の約束を取消せと云はれた時に、娘が言ふに、大學に居て人を持て離されて才物だの學者だの言はれた時に手を執つて約束して置いて、今や眼が見えなくなつて尙更我が手と我が助けの要る時に當つて、忽ち前約を取り消すといふことは私としては出来ぬ、義理としても人情としても出来ぬ、此事ばかりは仰つしやる通りに出事ぬと云つて、お父さんの言ふことを聞かなかつた、お父さんの言はるゝことを聞かぬことを子供に教ふることを望むのではありませぬか、其貞操と、深い同情とを歎美するのであります。これは日本に例がある親御の方から約束を破毀せよと云ふことは在方に行くと澤山あります、到頭セチバが二十五歳になつて婚禮の出来る年になつて、親の許しはなかつたが婚禮をして其後親も許すことになつた、ヒューバは博物熱心であつたが、眼の見えぬ様になつてから愈々深く研究して、一人の僕に斯うせよあゝせよと云つて研究した、取分け蜜蜂の動作習慣を調べて、これまで當り前の學者の知らぬ所を發見した、見る力が非常に要る、そしてこれまで眼の見える人が數千年來發見し能はざる所を發見した、僕も働いた

が此夫人の助けも中々大なる事であつた、古人の中に有名な人もあり、大した人もありますが、此夫婦ほど、生涯安樂に暮らした人はないと云ふ程であります、これは、セネバの話であるが、日本にもこれと同じ話があります、これは此方々の中にも御存じの人があるかも知れぬから、間違へば直して戴きたい、福島縣の何炭鑛持主の何某と云ふ人、それは炭鑛に骨を折つた人であるが其人が目が見えなくなつて、姉さんを以て、家内を里へ連れて來て貰ふて、私は眼が見えなくなつたのだから、此婦人は眼の見えぬ者に添はすは可愛さうであるから、離縁して貰ひたいと云ふことを連れて行つてから話した、すると、怪しからぬことである、眼のある中に私が何か氣に召さぬ事があつて離縁と云ふことならば何とも仕方がないで御請するであらうが、眼が見えなくなつて、それに連れ添ふて居ては氣の毒と云ふことでは承知ならぬと云つて連れ歸つて、今日は何十萬と云ふ身代でそれを皆整理して、其主人が目が見えぬ様になつてから、これは粗いこれは細いと云ふことを鑑別すると云ふ、此盲人の優れた人と云ふことは確かであるさうであるが、此婦人も大した婦人であると云つて其土地の人は褒めて居るといふ話、これは實業の日本と云ふ雜誌で讀んだのであります。これは日本にさういふ貴婦人があると云ふことは西洋の本で讀んだよりも感じが違ひます、我國にもさういふ人がある、又これは私の方の學校に關係のある人で、それが或る所に轉勤せられて、或時學校に來られて生徒の作つたものを買ふに、啞生作とない方が人に上げるに宜いでないかと云ふことであつて、私は喫驚した、難

有^あい事^{こと}であるが、然^{しか}し啞^あ生^{せい}の啞^あの字^じがあるが爲^ために、請^うけが惡^{わる}いと云^いふ様^{よう}ではやつて下^{くだ}さるなと云^いつて御^{おん}斷^{だん}はりをした事^{こと}がありました、それからモウ一^{いっ}は年^{ねん}始^しに啞^あ生^{せい}の作^{つく}つた新^{しん}聞^{ぶん}換^{かん}とか云^いふものを配^ばつた、さうすると年^{ねん}始^し早^{さく}々^く穢^{けがら}らしいと云^いつた人^{ひと}がありました。今日^{こんにち}では、盲^{もう}啞^あの様^{よう}な者^{もの}を恐^{おそ}ろしいものと云^いふ感^{かん}じはなからうが穢^{けがら}らしいものと云^いふ人^{ひと}がまだあります。どうか啞^あ人^{じん}も矢^や張^{はり}人^{にん}間^{けん}であつて、穢^{けがら}らしい者^{もの}でも恐^{おそ}ろしい者^{もの}でもない、寧^{むし}ろ可^か愛^{あい}ものであると云^いふことを小^{ちひ}い時^{とき}から御^{おん}吹^ふ込^こみ下^{くだ}さる様^{よう}に願^{ねが}ひたいと思^{おも}ひます、

(了)





幼稚園さうちえん

正

臣

君か代きみよは千代ちよとはやくも歌うたふなり

十ととせに足たらぬ幼きさな兒こにして

おひたくむすゑのよゆかしわかつた氣けの

庭にわのをしへに靡なびきあひつゝ

はゝならぬはゝのなさけにまなひくさ

つむともしらすつめるその哉や

幼稚園さうちえん

美

静

おのつから遊あそひなからになれさせて

をしふる道みちのたのもしきかな

今年ことしの春某幼稚園はるばるさうちえんの祝宴しゅくえん

につらなりて女教師じよけうしの心こころ

つくしを思おもひやりて

千

秋

こゝろ遊あそくをしへの庭にわのはゝこ草くさ

こてふの爲ために身みをやつむらひ



海うみのあなた

佐々木信綱

夕雲浪ゆうぐもなみをやとて

紅くれないの海うみの上うへを

歸かへりくる白帆しらほ一つ

なつかし海うみのあなた

あなたにそ我わが背せいます

夕つゝ空にみえて

磯ちかくわそふ鷗

たのしけにうたひかはす

なつかし海のあなた

あなたにそ我背います

見るゝあたりくらく

うたひつる鷗去りぬ

歸りくる白帆見えす

なつかし海のあなた

あなたにそ我背います

旗とりの遊び

小林つねを

たのしき庭の

ここかしこ

はたを立てゝぞ

勇ましく

我れおとらじと

すまひある

白ろきむらさき

うすあかさ

帽子のいろも

やさしくて

あはれつはもの

なつかし、

婚姻の要件

(承前)

谷川清

第五、當事者の品等

諸國の法律制度中人種とか身分とか階級等に依つて婚姻に制限を設けることは往々ありまして近世まで其跡を遺したるものも御坐ります、現に我日本帝國の如きは維新の際までは士民の區別が嚴重でありましたのみならず、尙ほ他に穢多とか非人とか稱する者がありまして相互間自由に婚姻することが出来ませんでした、其後は等の者と婚姻を爲し得る様になりましたは實に明治四年八月の事で「華族より平民に至るまで互に婚姻被差許候條雙方願に及はず其時々戸長へ届出つべき事」との布告を發布せられました時に在るので御坐ります又外國人と婚姻を爲し得る様になりましたは明治

六年三月布告第百三號に基くものであります、現在と申しましても皇族方に付しましては皇室典範第三十九條に因りまして婚嫁は同族又は勅旨に因り時に認許せられたる華族に限ると御坐ります、又陸海軍々人に付しましては別に結婚條例なるものがありまして當事者の品等に關し大に制限する處が御坐ります、即ち陸軍々人には明治十四年五月三日乙第二十五號の陸軍省達陸軍武官結婚條例なるものがあり、海軍々人には明治二十五年十月六日第八十七號の海軍々人結婚條例なるものがあります、然し是等は皆特別の理由あるものでありますして一般のものではありません。

第六 尊屬又は之れに代るべき者の同意
 現行民法第七百七十二條但書に男が滿三十歳女が滿二十五歳に達したる後は此限りに在らず（即ち

同意を要せず）と御坐ります、蓋し男にして滿三十歳女にして滿二十五歳に達しますれば相當の經驗を積みもし又能力に於ても完全に發達致しましたものと看做すことが出来するから老耄に近き父母等よりも却て適當の判斷を與へ得べきものであると推定することも出来得べく、殊に女子に至りましては其生育男子に比較して一層早熟致しますを常と致しますのみならず女子は男子に比して嫁期を失ひ適當の婚姻を爲し難さに至る事情がありますから一層早く制限を解除致しまして自ら自身の運命を決せしむるの自由を得せしむるの必要がありますると認められました結果五年を短縮せられたのであります、而して婚姻に付いて同意を與ふることを得べきもの、順序は次の通りであります、

(イ) 家に在る父母の生存するときは其父母の同意を得るを要す

此處に家に在るとは其家籍内に在る父母の謂ひにして家居を別にすると否とを問ひません又養父母繼父母若くは嫡たることをも問ひませず總して之を包含致して云つて居ります、(ロ) 父母の一方が知れざるるとき、死亡したるとき、家を去りたるるとき又は其意思を表示すること能はざるときは他の一方の同意のみを以て足る

父母の一方が知れざる時とは例へば私生子が未だ父の認知を得ざるもの、如きであります父母の一方が家を去りたる時とは父又は母が離婚若くは離縁に因りまして家を去りたる場合の如きであります、又父母の一方が意思を

表示すること能はざる時とは心神を喪失致しました時とか生死不分明等の場合を申します是等の場合は皆父母の一方が家にあらず又家にあるも其意思を表示することが出来ない場合でありますから其の家に在り且意思を表示することの出来る他の一方の同意のみを以て足れりと致します、之れは已むを得ない結果だと存じます、

(ハ) 父母共に其家に在る者なく又は家に在るも意思を表示すること能はざる時は未成年者に限り後見人及親族會の同意を得るを要す

(ニ) 繼父母又は嫡母が子の婚姻に同意せざるときは子は親族會の同意を得て婚姻を爲すことを得、

子は父母の同意を得るにあらざれば婚姻を爲

すことを得ずと前に申述べましたが、繼父母及び嫡母に在りましては子を愛護するの情念と乏しく、當底慈愛厚き實父母の如くなるを望むことは出来ません、故に實父母に在りましては不當に同意を拒みて其子の利益を顧みざるが如きことは殆んどありません、けれども繼父母又は嫡母に在りましては自然の血統なき爲めか愛護の情念乏しく爲めに子の利益を顧みずして不當に其同意を拒むことなしと保證することが出来ません、斯の如き場合に於て子に婚姻を爲すの途を與へませんのは婚姻能力を制限すること甚だ酷に失するものと謂はなければなりません、故に此場合に在りましては子に與ふるに親族會に同意を求むるの權を以てし、親族會に於て之れに同意致しまし

第七 婚姻の方式、

(A) 届出の要件、

たるときは繼父母の一方又は双方若くは嫡母の不同意なるに拘らず適法に婚姻することが出来ず、

婚姻の方式は一般に形式上の要件に屬しますけれども其之れを定むるに至りました目的は一つは之に因つて婚姻を公示致し、二は之れに因つて當事者の意思の確實を保障するにあり、是を以て我民法に於ては公示の目的と意思の確實を保障するに必要なる限度に於て努めて簡單なる方式を定め、當事者双方及び二人以上の證人より口頭又は署名致しましたる書面を以て戸籍吏に届出づるに因つて婚姻の效力を發生致すべきものと定めました、

(B) 届出の受理、

婚姻に關する法律上の要件は概して公益に基くものでありますから其要件を具備するにあらざれば正當の婚姻を爲すことが出来ません、故に戸籍吏は婚姻の届出を受けますと同時に先づ是等の要件を具備するものなるや否やを檢しまして其之れを具備したることを認めました後にあらざれば其届出を受理することが出来ないのは勿論のことであり、然し法律上の要件を具備しませぬ婚姻の届出は戸籍吏に於て之れを受理すべからざるものと致すに拘らず戸主の同意を缺きたる婚姻の届出のみに就ては唯戸籍吏をして一應其注意を促さしむるに止りまして其注意を爲したるにも拘らず尙ほ當事者が戸主の同意を得ずして其

届出を爲さんと欲しましたときは戸籍吏は其の届書の受理を拒むことは出来ません、盖し戸主の同意を得るを必要とせざるは其婚姻を爲さんと欲する者の利益保護に重きを置いた所以でありませう、然し戸主の同意に反して婚姻を爲したる者に對しては戸主權をして之れを離籍し或は之れが復籍を拒絶することが出来ます。

(C) 在外日本人間の婚姻の届出、

日本人が外國に於て婚姻を爲す場合には外國に日本の戸籍吏なき故其國に駐在する日本の公使若しくは領事に届出を爲すに依つて完全の效力を發生するものであります、「終」

子供の友としての動物

ひ さ 子

子供は、生物をも無生物をも自然物をも人工物をも、自分の友といたします。已に何物をも友といたします以上、大人は、子供が、いかに良き友と良く交はりつゝあるか、其友をどんなに取扱つて居るかなどいふ事柄に對して、常に注意を拂はなければなりません。

動物は子供の親しい友の一つでございす。今日は之に付て少し考へて見たいと存じます。

兎々何を見てはねる十五夜御月様見てはねるといふ童謡がございす。或時私が多勢の子供と一緒に之を謡つて遊んで居りますと、子供等は之を動物を代へて盛に歌ひ出しました。曰く犬や／＼馬や／＼、牛、猫、鼠、豚、蝶、鳥、鳶、雀、蟻

など、殆ど口をついてそれからそれへと出て参りまして大層喜んで居りました。又或時一兒の「アタシノウチノ小サナ犬はネ、アタシが駆け出すとツイテ來ますよ」からはじまつて、皆々われも／＼と語りはじめました。曰く「ウチノ泰チャンが子何時でも猫にビスケットをヤルモノデスカ其猫は子泰チャンニバツカリクツ、イテアルキマス」「オトナリの犬は子オアツケツと言ふと食ベナイデ待つて居ツてヨシツて言ふと食ベマス」イツカ子鳥がオサカナノ頭を持て天へ飛ンデ行キマシタ」「ウチノ猫ハ梯子段ヲシユーツテ上リマス」「モーセンニチアタシノウチノ前に小サナ犬の子が一疋捨て、アツケユー／＼言てタノデスヨ、ソシタラバ荷車のオデサンが來て蹴飛ばスノデスヨ、二番目に來た人は良い人で危イツテヨケ

ナガラ行きました、ソースルトヨンの子が、アタシ貰てイクツア持て行きました」など、實にはてしもなく語るののでございます。

右はホンの一例でござりますが、子供が如何に動物に對して興味を有て居るか、如何に常に動物を観察して居るか、如何なる動物が特に子供に親しいか、動物に付て歌い、語り、きかせらるゝ事を如何に彼等は喜び樂むかといふ様な事は、何時も子供を御扱ひになる方々の御覧になる處でございませう。

子供が動物に付て語る事柄などに付て考へて見ますと、まづ彼等は常に動物の性質習慣する事爲す事を面白がつて或は珍らしがつて見て居るといふ事は確かでございます。又動物の内の或物は愛すればよく懷きて敢へて人に危害を加ふるものでは

ない、人の親切は動物も之に感ずるものである事も知らず、観察されて居ります。又子供は如何に動物を愛撫する性を有て居るか、如何に其安否起居動作に注意して居るかといふやうな事も分りますし、動物虐待とまでは行かずとも少なくとも動物に對して同情なき取扱をして居る大人がいか世の中に多くあるか、之を見聞く子供はとりも直さず悪い手本を示されて居る事になるといふやうな事も考へられます。

一体子供は自分自身已に活動が盛んで其身体は絶えず動いて居りますが、又外物も動いて居る方を歓迎いたします。ジツとして居る草木よりは風に動かされて葉のそよで居る方が面白かつたり、サラ／＼と流れる小川が嬉しかつたりいたします。まして心どいふものを持つて居つて自分で動

動物は非常に其好み愛し喜ぶ所となつて、従て動物の畫、話、歌などいづれも子供に喜ばれます。誠に動物を親愛する心情は子供の本能として有つて居る様に思はれます。動物は人間よりも下等であるなどいふ六かしい事はあまり解りもせず考へもせず、丁度我友であるかの様に考へたり扱つたりして好愛するのは子供の自然かの様に考へられます。

動物に對する此子供の好愛の情こそ誠に喜ばしい尊いもので、之を長ぜしめ之を移して以て人に對する道を盡させるべきで、子供が子供相應の人道實踐の初歩として、まづ動物を親切に取扱ふといふ良い精神習慣を養はなければなりません。それには、動物には生命があるといふ事、心といふものを有て居る事、喜怒哀樂の情あり知覺感覺ある

事、人間の様な詞で其苦痛や喜びを言ひ現はす發表するといふ力はないが嬉しい事は動物でも嬉しいし、打たれ、ばやはり苦しくもあり痛くもあるといふ様な事、此無告の動物をいたはるのは人類の道であるといふ事などは、是非知らしめ感せしめて、どうか動物に對する温かな同情を益々發達助長させたいものでございます。自然より子供に與へられたる一個の友として之に親切を盡す様にさせたいものでございます。

家に家畜又は其他の動物を飼養して、子供が其爲にいろ／＼の事をしてやるといふ風になつて居りましたならば、之に由て積極的に動物に對する道徳を教へる事ができますが、わざ／＼飼養した物でございせん場合にても、犬、猫、雀、鳥、蟻、蚯蚓、何でも手近な物に由て之に對する愛護の情

を養ふ事ができると思ひます。大人がまづ動物愛
憐の温情を有つて居つて其つもりで子供を導きさ
へすれば、随分其方面を養ふ事ができるのでござ
いませう。

「一昨年の事でございしました。私が毎日多勢の子供
を遊ばせます庭園の一部の地面に蟻がいくつも
く住處を作り穴をあけました。之を發見した子
は、「ヤー蟻ノウチ」と言ふのでふれまはる、
衆兒が集まる、折よく蟻が出たり入つたりする、
遠方から何かを引張つて来る、砂糖をやると眞黒
に集まつて来る、などからはじまつて、此いくつ
かの穴と之に住む蟻とは、子供に深き興味を與へ
まして、毎日々々衆兒が必ず此處を見まふといふ
事になりました。そうして見て居りますを「モシ
タレカイ知ラズニ踏ムト穴がツブレテ蟻ガカワイ

ソー」といふ事で、二三兒の發起で棒切をさがして
此處に繩張をいたしました。そうして相變らず毎
日此繩張のまはりにしやがんで「蟻ハフタリデ
逢フト話ヲシテマス」とか「ソラ出テ來マシタ」と
か「ハイリマシタ」とか觀察して居ります。そう
こうするうち段々夏になり其繩張函はたれも踏ま
ぬ爲に小さな草が澤山生えて參りました。すると
多くの兒が申しますには「此草ハトラズニオイト
キマシヨー、暑クナルト蟻ガミンナデ此草ノ蔭デ
涼ミマスチ」と、又時々小さな旗を豆細工などで
こしらへまして、「今日ハ蟻ノウチノオマツリ」
などと言ひながら其繩張のまわりに立てたりなど
いたします其様子恰も蟻を我友であるかの如く感
じて居る様でございまして誠に良い事であると益
々其方に導いた事でございます。

動物を親切に取扱ふといふ事が人の道であり子供
の道である以上、之に不親切をせぬは元より、假
にも動物を虐待するなどは少しもさせてならぬと
いふ事は分り切つた話でございしますが、實際世の
中には之をする大人や子供が随分多くございま
す。瘡をこけた馬に身に餘る重荷を載せて炎天を
引張り廻し、歩みがのろいといふので情容赦もな
くひつぱたく大人もあれば、蜻蛉の足を抜いたり、
蚯蚓を幾切にも切つたりするいたづらつ子もござ
います。動物を好愛するのは子供の本能と認めら
るゝものにも拘はらず、右の様な子供があつたり、
大人となつてから動物を冷酷に取扱つたりするの
は、之は皆大人が悪いのでございします。大人がま
づ自分の動物に對する親切さ加減を省み、改良す
べき點は改良して、人道の爲子供の爲に盡さなけ

ればなりますまい。

動物虐待の防止は實に是れ人道の問題にして教育
上、法律上、衛生上、經濟上、農政上、審美上、
動物虐待を防止して社會人情の根本的改善を計ら
ん、との大目的を以て、動物虐待防止會といふ會
が一昨年起りました事は誠に結構な事で、已に誰
方も御存じでいらつしやいませうが、直接に子供
の教育に當つて居る者は特に教育上から子供と動
物との關係に付て考へなければならぬと考へま
す。序でございしますから左に右の會の趣意書中の
一節を記します。

若し動物をむごく扱ふ事があたりまへの様に思はれてどこへい
つても平氣で牛馬をいぢめ魚鳥を苦しめて居る有様を子供など
が見たり聞いたりしますから自然にむこい事になれてやさしく
美はしい心をそなふ様になりませう、それでですから動物を可
愛がる様にするのは教育の上から言つても大切な事でありませ
う。

頑（こ）くない子供がとんぼの頭をむしつたり、いなこの羽や脚をとつたり、又すいんでは犬をいぢめ魚鳥を殺すなどいふわるさは其初めに悪い心ではありますまい、併し之がくせになると終には人に對してもむごい事をして何とも思はぬばかりか却つて人の苦しむゆゑをおもしろく思ふやうなねぢれたものとなつて恐ろしい人殺の罪をさへ犯す様にもなるのであります、云云、

耳漏（即ちみゝたれ）に付

きての注意及豫防法

故飯島八千溪寄

この一篇は長野小學校で、家庭に通知する爲に、いろゝの事項を定めて印刷に附して居る、其中の一項でありまして、前年亡くなられた、飯島君から寄贈せられて居たものであります。

○耳漏（即ちみゝたれ）もともと成つて 膿（うみ）や膿（うみ）に なるものわ 世間（よかん）に すいぶん 澤山（たくさん）あります 殊（こと）に 耳漏（じろう）から 脳膜炎（のうまくえん）を ひき起（おこ）して 大切な命（いのち）を失（う）す者（もの）も 有（あ）ります 〓 たとい それ

ほど迄（いた）に 至（いた）らなくとも 耳（みみ）が 遠（とほ）く 成（な）つて 生涯（しやうがい） 不自由（ふじゆう）を して 居（ゐ）るものわ よほど 多（おほ）いので あります 〓 況（いは）んや 耳漏（じろう）の うみから 他人（たにん）に 傳染（でんせん）する事（こと）も 有（あ）るので ありますから 〓 耳漏（じろう）に かかつたら 早（はや）く お醫者（いしや）様に 見（み）て いた だいて すつかり なふる迄（まで） 療治（りやうち）をしなければ いけません

○「耳漏（じろう）わ からだの毒（どく）が 耳（みみ）から 出（で）るのだから 之（これ）を なおすと 却（かへ）つ からだの害（がい）に 成（な）る」と云（い）ふ俗説（ぞくせつ）も、昔（むかし） 有（あ）りましたが 之（これ）に 實（じつ）に、 まち がつた 取（と）るに 足（た）らぬ説（せつ）であります

○鼻（はな）の病（やまひ）や 咽頭（のど）の病（やまひ）が もともと 成（な）つて 耳漏（じろう）に 成（な）る事（こと）が 多（おほ）く 有（あ）りますから 鼻（はな）や 咽頭（のど）の 病（びょう）氣（き）に かからぬ様（よう）に 注（ちゅう）意（い）する こと が 必（ひつ）要（よう）で あります

○鼻を かむ時に 一時に兩方を かむのわ 耳
 の爲に、危険でありますから、一時に兩方を か
 まないで 右の方を かむ時わ 左を おさえ
 左の方を かむ時わ 右を おさえ かつ
 づつ かむ様に しないでぬ いけません
 ○口を ふさいで 鼻で いきを する事わ 耳
 の爲にも 咽喉の爲にも 猶又 肺の爲にも 誠
 に 大切な事で あります 夜ねむる時に 口
 を あいて いびきを かく子供や 鼻が ふだ
 ん つまつて居て 口を ふさいでわ いきが 出
 来ない様な子供わ お醫者様にかかつて 療治を
 する方が 宜しゅうございます
 ○口の中を 清潔にする事も 亦 耳の爲に 甚
 だ大切な事で あります ですから 子供が 生れ
 て まだ小さい内わ 親の手で 毎日 口の中を

よく そーち してやる事が 必要で ありま
 す 少く 大きく 成つて 自分ひとりで 出来る
 様に 成りましたら 三度の食事の後にわ 其つ
 と必ず 口及び のどを すゝがせ 猶 朝でも
 晩でも 一日に一度わ はみがき又わ鹽を つけ
 て 齒を そーち させる事が 肝心で ありま
 す
 ○耳の中に 耳あか が ひどく たまつたり
 或わ 虫や豆や小石などが 耳に は入つたり
 或わ 耳の中が 痛んだり 或わ 耳が 遠く 成つ
 て どこか ぼんやり して居る様で ありまし
 たら お醫者様に 見て いたいく方が 宜しゅう
 ございます
 ○湯に は入る時に 耳の中え 湯を入れない様
 に 注意しなくてわいけません 赤子に 湯

をつかわせる時にわ かくべつ 氣をつけて願
います 耳の穴え 綿を ほぞに あてて 湯に
入れるなどわ よい注意と思ひます 夏 川え
あそびに行く子供わ 耳に水を入れない様に 注
意する事が 尤も必要である

○お醫者様の 言しづに よらないで しろーと
りよーちに 鼻の穴の中を洗ッたり 耳の穴の中
を洗ッたり する事わ けんのんな事です かん
ざしで、耳を ほるのも よほど 氣をつけない
と 危険です

○子供が たび／＼咽喉カタルと云う病(のどが
赤く成ッたり又わ はれたり そして のどが
いたむ病)に かかつて それが ながびいて
なからない場合 或わ アーと 口を大きく
あけて見ると 口の奥の方で のどぼとけの そ

ばで 舌の根の兩わきに有る まるいもの 即ち
扁桃腺と云ふものが はれて大きく成ッて なん
ぎをする場合にわ 手かくれに ならない様に
早く お醫者様に見ていただくが 宜しゆーご
ざいます

○以上の注意わ からだが 健康の時にち もち
ろん 守らなければならぬ事です とりわけ
鼻や のどに 病の有る時 或わ インフルエン
ザ ハシカ デフテリア チョーチフスなどの病
にかかった時 或わ かたねもや 顔に丹毒の
出来た時などにわ かくべつ 注意する事が 必
要であります 殊に 鼻の かみ方 口の中の
そーち等を 怠つてわ いけませんぬ
○小さい子供 又わ 重い病氣の爲に 自分一人
で できない者にわお醫者様の さしづを受けて

看病人が よく注意を してやらなくてわ いけ
ませぬ――なかく 床について居る病人わ 時々
ねがえりをさせる事が 必要です そして それ
が 耳の養生にも 成るのであります

○耳や のどの病に依ッてわ 或わ お醫者様が
扁桃腺の はれて大きく成ッたのを 切ッて下さ
る事もあり――或わ 鼓膜穿刺術と云ッて 耳の
極奥の方が わるくて うみを持つて かまわず
置いてもしぜんと 鼓膜に 大きな穴が 陥いて
中の うみが 出て来る様な病にわ 其の前に
お醫者様が 鼓膜に 小さく穴をあけて 早くな
おして下さる事も 有るそーで ごさいます

木綿漂白新法

平 岩 學 洋

皆様に今度は木綿漂白法を御紹介至しませう、先
づ銅鍋或は銅釜に適量の温湯をこしらへて、生木
綿百匁目につき炭曹達八匁を入れまして、よく
とかし、豫め水で濕してかさました木綿を其の中
に投じまして煮沸すること一時間位、其の間度々
棒を以て釜の中の木綿をかきまわし、其の儘浸し
かくこと一時間位にして引きあげ、絞りて清水で
洗ひ、次に清水を程よくこしらへてコロールカル
キ十匁を別の器の中で塊を崩さかきまわし、水を
加へてとかした者を其の中に注ぎかけてよくかき
まわした后で、前の木綿を浸し、暫時にして絞り
再び浸しかくこと三四時間位にしまして漂白せら
るゝを度として引揚げて絞り五六回清水で洗ひ次
に清水五升の割合に硫酸五匁注ぎよくかきまわし
て其の中に漂白木綿を浸しますこと三四十分間に

して取揚げて絞^{しぼ}り、清水^{せいすい}を以て數回洗滌^{さうかいせんじよう}しまして酸味^{さんみ}なきよーにして水氣^{みづけ}をさりてよくかわかすのであります

さきには號外^{ひょうがい}をもて一月^{ひとつき}のつとめを怠^{おこ}りぬ、今又旅中のゆゑなもて一月^{ひとつき}のつとめを怠^{おこ}る、次にはこのおぎないをなさむとおもへり

(料理詞^{りやうりことば})

石井泰次郎

◎そぼろ切^{ぎり}、細^{ほそ}くけづりたるをいふ、又^{また}をぼろとのみもいへり、

◎えりがつを、かつをぶしを、よりたる如^{ごと}く、小刀^{こがた}にてうすく削^{けず}りたるをいふ、又花^{またばな}かつをともしへり

◎はねがつを、これは大^{おほ}きく削^{けず}りて、はねかへりたるをいへり

◎目刺^{めざし}、小魚^{こぎな}の乾物^{かもの}の目^めをさしてつかねたる、今は目刺^{めざし}といへり、兩刺^{りやうざし}とて川魚^{かはうを}の小さきを二つ串^しにさしたるあり、

◎山吹^{やまぶき}なます、夏^{なつ}の初^{はじめ}の鱸^{なます}なり、ふなをつくり身^みにして、山吹^{やまぶき}の花^{はな}をかいしきたる上に盛^{うへ}るをいへり、

◎卵^うの花鱸^{はななます}、ぬたなますの上^{うへ}へ、湯^ゆびきたる魚^{うを}(湯煎^{ゆせん}ざつとしたるなり)の身^みをちらし盛^もるなり、またおろし大根^{だいこん}をおさても、卵^うの花^{はな}といへり

◎だし、かつを、煎^{いっ}て味^{あじ}をだしたる汁^{しる}をいふ、本名^{めい}は、かつをいろりといふ、いろりは煎取^{いりとり}の約^{やく}なり、煮^にだしたる汁^{しる}といふべきを、略^{りやく}して、だしのみいへるなり、豆^{まめ}なるは、豆^{まめ}のいろりなり、こんぶはこんぶいろりなり、今は共に、單^{ただ}にだしとのみいへり、片言^{かたこと}なり、

◎庖丁刀、今ははうちやう、とのみいへり、これ

も、かたなといふべきをはぶける片言なり、

◎切板、今はまないたとのみいへり、古くは切板

といへり

黒澤登幾子傳補遺

下村三四吉

二十三日の審問後は「十日餘り捨られて更に呼出しなかりけり、もはや卯月も暮て行、五月の間の晴れやらす」ほとゝぎす血に啼くころとはなりぬ。その七日并に十五日の二回、更に呼出しありて「此度江戸表に於て石谷因幡守、池田播磨守、松平伯耆守殿、御尋の筋有て江戸表へさし下す」との命をうけぬ。

……………一禮を述て立出れば次なる大白砂にて

御繩をほどきて、白布を帶の如くたゝみて御繩の替りに掛替らる、等九駕籠をつり出して、其中に新しき四布ふとんを二枚敷て、其中に乘坐る。諸士代の御方々に一禮をなして、駕籠に乗り、大なる門を出れば、御役方には、柏原與五郎、柴田勇四郎御兩所、ついの四枚駕籠新しく仕立、等九駕籠の中に引をへ、乗かけ一駄、長持一竿、小使侍三人、其内二人は御方々の御家來衆、外に露拂二人、都合八人、大津までは四五十人白装束に送らるゝ。大津より皆々駕籠にていとまこひしてわかる。其より五十三次の宿々、町役人残らず押棒つき、赤綱手先二行に連り、道中の雲助在々所々より人足數多呼出し、宿々より露拂二人づゝ、都合四人づゝの下坐ふれにて、恰も大名の往來の如し。問屋場の

前は駕籠を地に付けず、肩を入替へ飛が如くに急ぎける。宿りは乗掛にて先づれし、七つに着、等九駕籠は宿の中程に居、奥座敷は御役人次の間は御家來衆、等九駕籠の双方へは高張を付、寝ずの番六人づゝ駕籠の穴双方より二人づゝ蚊をあふがせ、明七つ立にて往來す。御城下は御城代りつばの侍眞先に進み、家中の方々大勢にて御先向ひ、先駕籠の役人駕籠より下りて路地にて禮儀を述て往來す。宿々は殊更嚴重にて、商人旅人も道をよぎらず、見物數多出で軒下に平伏す。

登幾子が江戸に押送せられし道中の状況右の如し沿道の觸目感想する所は、之を歌詞にあらはして自ら慰めけり。

宮の宿七つ立にて鳴海宿にてはのゝ

と夜明ければ、

ぬば玉の夜も明かた鳴海かた

たもとをしぼる五月雨の空

と咏じければ、御役人ちかない、明分になつて

きた、又荒井の御關所舟中にて

旅衣あら井の關をすき越えて

かぜにまかするけふの早船

其より毎夜〱歌はできたかと御尋ありければ

京都揚り家にてつり置たる歌あり、北野天満

大自在天神宮といふ事を歌の上に居てよみけれ

ば、此を出して示す。

さきみがためはるゝいゝに北野なる

神にちかひをかけてたのまん

たたまはこの道ふみわけてけふこそは

神の御前に引れ來にけり

の　野の末も神の御垣もをしなへて

梅のにはひはかはらざりけり

て　手すさびに折らばやをらん神垣の

はなてふ花にこゝろうかれて

む　ひら雨の雲の絶間を降出てい

名のるや神の山はといぎす

ま　ます鏡きよき光りは幾千代も

八百萬代のかみの御前に

む　武藏野にしげるよもぎの露分けて

雲井へかよふ神のみちびき

た　たまちはふ神の道とてすなをなる

むかしにかへれ日本くにびと

い　いにしへもいまもさかゆる菅原の

神の御末のすゑぞたふとき

し　しがらみとなりてといめよ君が代の

千代のためしを神にちかひて

さ　さらぬだにかもひをこめし神垣に

夜な／＼もゆる夏虫のかげ

い　いくちよも色はかはらじ神垣の

千本にしげる松のみどりは

て　照すかす朝日の影ともるともに

きよき心をうつす御手洗

む　むら千鳥神の御山におりはへて

松に八千代の音をのみぞなく

じ　いきしまのやまと心を神かけて

みがくひかりは四方にかいやげ

む　むさゝびとなりても神の御社に

君が爲にや行きかよひせん

ぐ　ぐみわけて神やきくらん玉はこの

道をなかるゝ水のこゝろを

う
うさこともうれしき事にかはるらし

かけしちかひは神のまに／＼

○江戸にて審問をうけし次第は本傳にのべたれば

今は略しつ。登幾子はその十月二十七日終に「日

本橋より五里つゝ山城國常陸國右の場所御構へ、

中追放被仰付」たり。それより、下野國茂木村に

下り住まひしことも前に記せり。登幾子が自叙記

の末尾に曰く、

我老衰の身として、三ヶ都の獄中しし、五十

三次等九箇籠の難儀、淺草ための病氣、幾度か

死を覺悟致し、危きこと虎の尾を踏むが如くに

して、身体をつゝしは、全く以て天の御助な

るべしと存じ、國家安全の御祈禱怠らず勤め居

り候。

と、愛國の至情藹然として掬すべし。

○明治八年茨城縣參事關新平氏より、登幾子の誠
忠につきて特別賞賜の儀を太政官に上請せり。

茨城縣參事關新平上申書

時子夙に勤王の志を懷き、京師に至り、藩主の

冤を訴ふる等の行實人口に膾炙し、詠歌は振氣

篇と稱する書に載有之趣に付、水戸縣舊官員

へ尋問候處、安政五戊午舊藩主贈從一位源

齊昭諱經の冤枉に罹り幽蟄の厄に遭ふに際し、

慷慨悲憤國家の爲め誓て其冤を雪かんとし、家

産を顧みず、遠く京師に赴き、東坊城家に便り

藩主の幽屏を解かんと欲す、事未だ施すに及ば

ず、幕吏の逮捕する所となり、繫獄艱難九死を

出て一生を得、己未十月追放の命を以て漸く家

に歸るを得たり。

初め父光仲舊修験にて、粗々群書に涉り、子弟

を教^{けう}育^{いく}し、時^{とき}子^こ其^{その}業^{ぎやう}を襲^{うつ}ぎ、文^{ぶん}辭^じを善^よくし、國^{こく}歌^かを好^{この}み、其^{その}英^{えい}敏^{みん}男^{なん}兒^しも及^{およ}ばず。幕^{げふ}府^ふ季^き世^{せい}奸^{けん}邪^{じや}の徒^と追^{おひ}々^{くち}忠^{ちゆう}正^{せい}の士^しを黜^{しりぞ}くるを聞^きき、憤^{ふん}懣^{さん}に堪^たへず、天^{てん}下^かに先^{さき}ち、大^{たい}義^ぎを唱^{とな}へ、西^{せい}上^{じやう}力^{ちから}を王^{わう}室^{しつ}に効^{いた}す、其^{その}義^ぎ氣^き篇^{ぺん}志^し世^{せい}の知^ちる所^{しよ}。草^{そう}莽^{まう}間^{かん}の婦^ふ女^{にょ}には無^む比^ひの者^{もの}に有^ある、然^{しか}るに御^ご賞^{しやう}典^{てん}遺^い漏^{ろう}に及^{およ}び、遺^い憾^{かん}不^ふ尠^{せん}、今^{こん}日^{にち}に至^{いた}り上^{じやう}陳^{ちん}不^ふ都^と合^{がふ}には候^をへども、餘^よ命^{めい}もこれなきものに付^つき、特^{とく}別^{べつ}の御^ご詮^{せん}議^ぎを以^{もつ}て終^{しゆう}身^{しん}三^{さん}人^{にん}口^く下^かし、賜^{みづか}ふ候^を様^{やう}仕^しり度^ど、別^{べつ}冊^{さつ}履^{りふ}歷^{れき}及^{およ}び即^{そく}今^{こん}一^{いつ}家^かの人口^{こう}書^{しよ}添^{かき}此^{この}段^{だん}相^{しやう}伺^{かう}候^を也^{なり}。

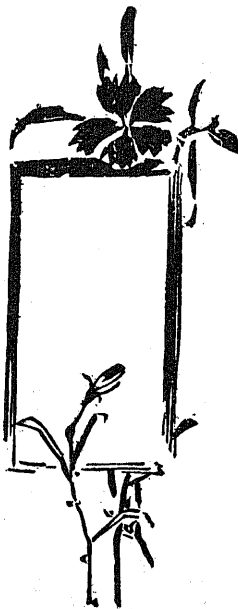
右^{みぎ}につき、朝^{あさ}廷^{てい}よりほどなく終^{しゆう}身^{しん}祿^{ろく}御^ご下^か賜^{みづか}の御^{ごん}沙^さ汰^たありき、今^{いま}その辭^じ令^{れい}書^{しよ}を左^{ひだり}に記^{しる}して終^{しゆう}結^{けつ}となす。

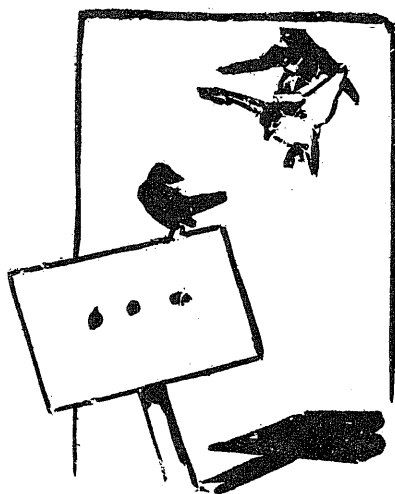
辭 令 書

茨城縣錫高野村

黑 澤 登 幾

右^{みぎ}夙^{しよく}に尊^{そん}王^{わう}の心^{こころ}厚^{あつ}く専^{せん}ら心^{こころ}を國^{こく}事^じに盡^{じん}し去^さる安^{あん}政^{せい}五^ご年^{ねん}窃^{せつ}に上^{じやう}京^{きやう}遂^{すい}に幽^{ゆう}囚^くに就^{しゆ}くと雖^{いへど}とも始^{はじめ}終^{しゆう}志^しを變^{かは}ぜざる段^{だん}奇^き特^{とく}の事^{こと}に候^を依^よて爲^な其^{その}賞^{しやう}終^{しゆう}身^{しん}現^{げん}米^{まい}拾^{しつ}石^{せき}下^か賜^{みづか}候^を事^{こと}





●女子高等師範学校

本年の入學生

本年の應募人員總計六百六十三名内文科に二百四十四名理科に三百九名技藝科に百十名而して先月十二日入學を許可せられたる者は文科に二十三名理科に二十六名技藝科に二十六名なり。尙、先月二十九日には家事専修科 二十五名の入學許可式

を舉行したりといふ。

職員員の異動

新學期になりて多少職員員の異動を見る。福井縣師範學校教諭近藤耕藏氏は助教授として來任本校及高等女學校に理科の教授を擔當する事となり、東京府立第一高女教諭森喜一氏囑托として本校の圖書を教授せられ、小學校には中村訓導市内小學校に轉し代つて新潟師範附屬訓導前田れん子及佐賀縣師範附屬訓導小出未吉氏來任、幼稚園には岡山師範保姆田邊春子來任せられたり。

郊遊會と運動會

先月三十日土曜日、本校生徒の郊遊會を千葉縣中山寺に開きぬ。本月五日には附屬小學校の運動會は大久保に行はるべく、尙十五日頃には高等女學校の運動會は東

京高師附屬中學校構内に開かるべしと聞けり。

●保姆養成所

在仙臺の春日えつ、立花せん二氏の發起にて同地師範學校内に保姆養成所を設置し、幼稚園保姆たらんとする者及一般婦女に育児、保育の方法を知らしめんと目的にて、本年一月より開所せしが、現在生徒は二十七八名にして、内十七八名は保姆の資格を得て、來る七月卒業の上、それ〴〵各地へ赴任する事となるべしと、目下適良保姆缺乏の際に當り、此事あるはまことに喜ぶべきことなり。因に同所修業年限は六ヶ月、生徒は高等小學校卒業の者より取り、學科は教育、保育、育児、恩物取扱方、手藝、唱歌、遊戲なり。

會 報

第九總會

先月二十一日、午後一時半、女子高等師範附屬幼稚園に於て、本會第九總會を開會せり、當日は、高嶺會長先月來病氣のため出席せられず、中村主幹代つて、開會の辭を述べ、次ぎて黒田教授登壇、先づ歐米フロエベル會の狀況及事業を述べて本會の遂行すべき事業につきて、有益なる忠言を與へられたり、(次號掲載夫より會務の報告、唱歌等に移り、次ぎて、東京盲啞學校長小西信八君の盲啞教育の起元につきて有益なる演説あり(本號掲載)終りて幹事投票ありて休憩、此間、參考品、成績品の展覽をなし、夫より庭園に出で、テニス、輪投其他思ひ〴〵の遊戲をなし、尙、當日は

庭園二ヶ所に休憩所を設け、團子、菓子等を備

へおきたれば、各好む所につきて休息談話に時を

過し和氣霽々の間に散會せり。

尙當日の來會者は客員招待員等を合はせ百二十名

許りなりき。

幹事改選の結果、野口、田中ふさ、山下、雨森、

小關の五氏當選せられしが、田中、山下の二氏辭

任につき次點者、和田、武井の兩氏登任したり。

自明治三十六年四月會務報告
至同 三十七年三月

一當年度内に遂行せし事項は左の如し

一總 會 一回

一常 會 四回

一組合會 七回

一幹事會 五回

一雜誌發行 十二回

右組合會は幼児發育研究組合にして會員十九名毎月一回開
會文學士松本孝次郎氏情緒、催眠術と兒童との關係、兒童
の個性及愛國心の諸題に就て講話ありたり

一會員 總數 七百二十九人 三月末關

内

在京會員 二百八十五人

地方會員 四百四十四人

入 會

兵庫縣武庫郡御影町郡家村

山口縣吉敷郡糸米倉増安一方

本郷區西片町一〇に廿六川井方

麻布區三軒家町一九

全 區 區島居坂五吉住方

北海道札幌區北一條東三ノ二

北海道札幌區南一條西四ノ五

香川縣三豐郡觀音寺町幼稚園

神田區表神保町二

麹町區富士見町一ノ一

東京市養育院小學校教員

豐多摩郡淀橋裁判所内

七十六

柳澤てる

右紹介中原ふく

奥田誠一

足立タカ

右紹介小谷野千代

坂元つや

佐々木はる

右紹介住吉幾江

松本菊次郎

吉岡美馬

右紹介淺岡はま

津坂クニ

右紹介大西永太郎

菊地徳次郎

山田ます

岡仁三郎

松浦しな

女子高等師範學校

全

全

全

仙臺市北四番町五

轉居

仙臺市元常盤町九

島根縣女子師範學校

福島縣相馬郡中村

香川縣師範學校附屬幼稚園

安藝國宇品港向宇品二六九一

佐賀縣高等女學校

岡山縣津山高女學校

愛知縣立高等女學校

兵庫縣女子師範學校

長野縣高等女學校

秋田市高等女學校

山口縣高等女學校

福井縣高等女學校

島根縣女子師範學校

右事務所申込

井村しげ

齋藤のぶ

三輪もと

高松幾代

右紹介内田たね

原ちかじ

右紹介立花せん

島つね子

宮村順

野崎しも

中川えね

高野わさ

山本つる

宮地ますほ

厚見幸

立野たがえ

薄岡たか

赤間よね

岩瀬かよ

村田きぬ

石津まつえ

靜岡縣松高女學校

愛媛縣今治高等女學校

岐阜縣岐阜高等女學校

愛媛縣宇和島高等女學校

鹿児島市高等女學校

和泉園堺市高等女學校

熊本縣八代高等女學校

山梨縣中巨摩郡玉幡村新海榮太郎方

牛込區矢來町五三

麹町區元園町一ノ二五

小石川柳町廿四水野地内樋口方

麹町平河町六ノ二

山形縣女子師範學校

福岡縣鞍手郡飯高等小學校

麻布區我善坊町四九

日本橋區濱町一ノ二養徳幼稚園

牛込區原町三ノ五三

橫濱市平沼仲町一ノ六

山口縣下關實業補習學校

四谷區傳馬町一

牛込區新小川町二ノ一

牛込區東五軒町五四

會員逝去

高田ます

柏木ふさ

安藤貞

木村寅枝

藤岡とき

根來まさ衛

安東てい

高橋さき

龜岡伸

鈴木たけ

石川ふさ

奥野まさ

館つね

宗秀馬

近藤ハヤ

片桐くさ

中桐確太郎

佐藤藤

阿部つる

土川五郎

小岩えい

田村和子

會員大島小春氏は永々病氣の處先月十四日郷里に於て
逝去せられたり謹みて弔意を表す

會費領收 自明治三十七年三月十六日
至同 四月二十四日

金 額

一〇〇	六〇	一〇〇	九〇	一〇〇	七〇	一〇〇	九〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	六〇	六〇	一〇〇	一〇〇	六〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇
三六、一三	三七、八	三六、一二	三七、九	三七、四	三七、二	三七、七	三七、四	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、四	三七、四	三七、一	三七、九	三七、一	三七、一〇	三五、一二

姓 名

栗山とく	寺島得	上野か	松岡くす	坂井愛子	齋藤せい	田村い	山根のぶ	垣川三枝	野崎しも	野口貞	石島廣	水原いと	横山つや	松村ひさ	坪内きく
------	-----	-----	------	------	------	-----	------	------	------	-----	-----	------	------	------	------

二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇
三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二	三六、一二

千賀千え	遠藤しづ	山田しう	今泉謙二	鎌田八重	石橋つね	小原みよ	奥田誠一	青山堀子	楠田睦子	足立たか	宗秀馬	岡人たね	北島周	脇谷しけ	對馬かめ	石原淳子	佐々木茂	堀越たけ	加藤たけ	大野朝比	田原かね	土川五郎	齋藤みね
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

六〇	九〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	四〇	一〇〇	五〇	三〇	五〇	六〇	三〇	六〇	三〇	五〇	三〇	五〇	三〇	五〇	四〇	五〇
三六、一〇—三七、三	三六、七—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三五、一一—三六、四
猪俣みさを	岩崎たつ	川島庄一郎	山田やな	柴田ちた	近木とし	大和田りやう	大友のふ	岩川ひさ	橋本はな	内藤いね	中桐確太郎	小岩えい	鳥居シク	木村一千代	高木基	前野とき	佐藤つや	今井つな	中島行徳	永田かい	吉田こう	櫻井光華

五〇	四〇	五〇	五〇	五〇	三〇	五〇	五〇	一〇〇	五〇	一〇〇	五〇	九〇	四〇	三〇	四〇	三〇	四〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、四—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、七—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三七、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三	三六、一一—三七、三
岡山秀吉	安達かつ	廣瀬みつ	高橋しげ	野澤あい	大竹みさを	津原ちか	安西せい	尾立とみ	吉田しう	小関すて	利光しづ	寺尾きく	竹澤さと	石井國次	横田けい	金子きた	古市幸	古市静	伊藤貞勝	小谷野かね	岡田千代	佐藤むめ

五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 三〇 三七、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 八〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 二四〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 三〇 三七、一一三七、三
 三〇 三七、一一三七、三
 三〇 三七、一一三七、三
 三〇 三七、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 四〇 三六、一一三七、三
 六〇 三六、一一三七、三

妹尾 明
 佐々 明
 佐藤 みさな
 永井 待枝
 水口 みつ
 永田 らく
 浅井 はつ
 田村 すみ
 小具 てい
 保科 修
 浅野 てふ
 藤並 きやう
 勝田 すみ
 小出 雷吉
 市川 源三
 江藤 みほ
 石川 いし
 羽田 ゆき
 佐野 とく
 佐久間 ね
 山崎 彦八
 玉尾 こま
 三好 すい
 澤 ぬい

五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 五〇 三六、一一三七、三
 一〇〇 三五、七一一三七、四
 一〇〇 三七、四一一三八、一
 一〇〇 三六、七一一三七、四
 一〇〇 三七、四一一三八、三
 一〇〇 三七、四一一三八、三
 六〇 三七、三一一三七、八
 一〇〇 三六、九一一三七、六
 六〇 三七、四一一三七、九
 六〇 三七、四一一三七、九
 六〇 三七、四一一三七、九
 六〇 三七、四一一三七、九
 二〇 三七、四一一三八、三
 二〇 三七、三一一三七、六
 四〇 三七、五一一三七、四
 三〇 三七、四一一三七、六
 五〇 三七、四一一三七、八
 五〇 三七、六一一三七、一〇

上遠野 あい
 築山 督清
 樺山 常子
 長興 のふ
 深江 とき
 迎て る
 立野 たかえ
 菊地の り世
 山下 つや
 中野 よね
 山口 きよ
 福田 あい
 服部 たき
 福尾 きく
 岩村 えつ
 安藤 たみ
 齊藤 みね
 丸山 かく
 片桐 くら
 柳井 つる
 菊地 徳次郎
 吉川 さい

●研成會々員募集●

第二卷第四號四月廿日發行

●會員に特待法あり

教授界

毎月一回二十日發行

●見本は一錢切手十三枚

●本誌の口繪 ●本誌の内容

各府縣重要物産精圖(標本代用極彩色) 每號一府縣宛
 ●論說 ●教授及訓練 ●實業科 ●學校及家庭 ●體育及音樂 ●實驗研究
 ●讀者文苑 ●學術 ●維錄 ●日露戰爭太平記 ●戰時教材 ●彙報

本會の目的は主として小學教育の實際を研究し併せて之が改善を謀り、教育者に研究の資料を與ふるに在りて寧ろ空論を避けて實際的の奏功的を主義として立ち、其機關として教授界なる雜誌を刊行すること茲に一年、斯界江湖の同情を得、今日の隆盛を致せるもの偶然にあらざるを謝せざるべからず、依て既往を將來に酬ひんが爲め、今回左の所に移轉して研究の素地を開き一層會務を精勵し、益々斯界に貢獻する所あらんことを期す、今や新學期に際し、誌面に百花を裝ふべく諸欄に精選を加へ、教案欄の如きは地理、歴史、理科、遊戯、商業、手工、國語、算術等の諸學科を増載し、更に戰時教材及び日露の活歴史を序述して雜誌の後段に裝ひ、以て競争的急報せる誤事多きものを繕かるゝの冗を省き、本會に入會せば一方に教授の資を仰ぐと同時に一方に又時局の大局に放眼するを得るの一舉兩得の策に出づるを得、輕々世の一方的讀物に意を曳かるゝの不經濟に陥らるゝなく、本會が斯界の爲めに要求するの趣意を了せらるゝ教育者は此際進んで入會の榮を賜はらんことを乞ふ

東京市麴町區

飯町四丁目一番地

研成會

(教授界實地所は全國主なる書肆にあり)

會費	
一冊金拾參錢郵稅壹錢五厘	
三ヶ月分	金四拾貳錢
六ヶ月分	金八拾錢
十二ヶ月分	金壹圓五拾錢

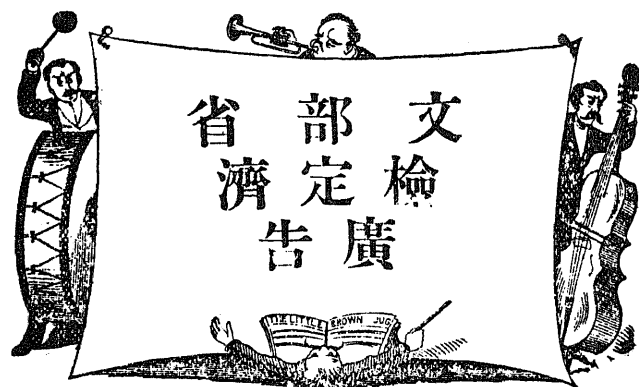
明治三十四年一月六日
第三種郵便物認可

○空前の唱歌良教科書！
○檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢

唱歌教科書

郵税一册に就き金四錢

生徒用	教師用
全四冊	全四冊
第一卷定價金三十錢	第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢	第二卷定價金三十錢
第三卷定價金三十錢	第三卷定價金三十錢
第四卷定價金三十錢	第四卷定價金三十錢



發行以來唯一の完全なる唱歌教科書と
を博し非常なる大用
三版發行の盛運に會
生徒用本行の同文
部省の檢定を経て更
らに其眞價を發揮す
るの榮を得たり
從來文部省檢定済
歌集は世に刊行され
即ち教師の参考書と
のみに許せられたる
ものにして生徒用と
も眞の教科書たるし
て檢定を経たもの
は實に本書が如何に
り科の教授上最完全
なる良書たるかを全
るに足るべし

●洋琴 金參百圓以上 各種
貳千圓迄

●ヴァイオリン 金五圓以上五拾圓迄 各種
八圓以上百五拾圓迄 各種

●鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種
舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

●樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル
金四圓以上其他バス、バリトン、テナリ、アルト、
ホルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾
圓迄

●鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 橫笛金壹圓以上
○學校用一組拾參圓

●手風琴 金貳圓五拾錢以上
參拾圓迄 各種

●保險山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢
以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジ
ーレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

●ピアノ、調律修繕

●オルガン

●郵券貳錢 御送附目録進呈